

分権型社会を拓く自治体の 試みとNPOの多様な挑戦

—地域社会のリーダーたちの実践とその成果—

第23号



発行

龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム

発刊にあたって

本論集第23号の発刊にあたり、御講演をいただいた皆様、御準備をいただいた先生方、また、政策学部教務課の職員の皆様に改めて感謝を申し上げます。

さて、今号では3編の講演録を掲載しています。

はじめに、屋久島を守る会の初代表として活躍された兵頭昌明様による「屋久島の地域政策の歩み」と題した御講演の記録です。信念を持った運動がいかに周りの人々を動かし、国を動かしたのか、屋久島の自然環境保全の最前線にいらした方からの感銘深いお話が採録されています。

また、第2回の公開講演会として、本学名誉教授の富野暉一郎先生から「『市民こそが公共』から始まった地域公共人材」と題した御講演をいただきました。市民運動家、市長としてのポリシーの原点にある御幼少の頃のお話や、政策学部創設に向けての秘話などを白石先生や土山先生を交えて詳しくお話をいただきました。政策学部や政策学研究科の今日につながる先進的な取組がどう進められたのか、大変興味深いお話です。

そして、第3回には「多様な連携によるまちづくり 洲本市域学連携事業12年の成果と、今後の展望」と題して、洲本市役所企画課の高橋孝様から御講演をいただきました。実践型の域学連携事業においてはトップランナーといえる洲本市の取組、なかでも本学との連携による再エネの取組や、域学連携を未来につなぐ「淡路島クエストカレッジ」について詳しくお話しいただきました。

今号に採録された講演はいずれも、地域社会を大きく動かす実践的な取組の記録であり、また、これを力強く推し進めた、まさに地域公共人材たるリーダーによる証言でした。お読みになる皆さんには、本号を通じて、たくさんの気づきを得るとともに、これら実践のさきにある課題への理解を深めていただければ幸いです。

改めまして、本号が、市民自治の充実と持続可能な地域社会の実現に資するものとなることを心より願っております。

地域公共人材総合研究プログラム
運営委員長 高畑 重勝

Contents

発刊にあたって

地域公共人材総合研究プログラム 運営委員長 高畑 重勝

2025年6月21日(土)

「屋久島の地域政策の歩み」

公開講演会

屋久島を守る会 初代表 元町会議員 兵頭 昌明

1

2025年9月27日(土)

「『市民こそが公共』から始まった
地域公共人材」

公開講演会

龍谷大学名誉教授 富野暉一郎

15

2025年12月13日(土)

「多様な連携によるまちづくり
洲本市域学連携事業 12年の成果と、今後の展望」

公開講演会

洲本市企画情報部企画課 新エネ・域学連携担当係長 高橋 壺

27

司会：服部 圭郎、今里佳奈子、白石 克孝

2025 年度（第 1 回）

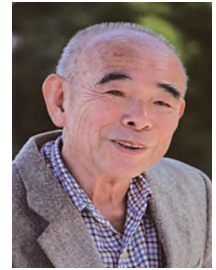
龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム 公開講演会

「屋久島の地域政策の歩み」

屋久島を守る会 初代代表 元町会議員
兵頭 昌明

兵頭昌明（ひょうどう まさはる）

1943 年屋久島一湊集落生まれ。屋久島高校を卒業後、気象庁で働く。その後、1971 年に屋久島に戻る。屋久島町議員となり、「屋久島を守る会」の代表として、屋久島のロープウェイ計画や周回林道の拡幅工事をまさに身体を張って、そしてその鋭敏なる戦略性で廃止に追い込むことに成功する。少し前に児童が急減していた小学校に黒潮留学制度を導入。近年の活動として、仲間たちと島人会議 (<https://yakushima-toujinkaigi.studio.site/>)、山ん学校 (<https://yakushima.keizai.biz/headline/583/>) (<https://www.facebook.com/mizunosima/>) まさに屋久島の生きたレジェンドと言っても過言ではないであろう。



服部 時間になったので、早速始めます。本日は、先進的地域政策研究という講義の講演会で、年に 3 回企画しているうちの、今回は 1 回目です。本日はオンライン開催で、兵頭昌明さんに屋久島から講演してもらいます。私から簡単に兵頭さんのプロフィールを紹介いたします。

兵頭さんは、1943 年、屋久島の一湊集落に生まれました。屋久島高校卒業後、屋久島を離れて気象庁で働きます。その後、1971 年に屋久島に戻ります。屋久島町議員になり、『屋久島を守る会』の代表を数年間務めました。皆さんもご存じだと思いますが、屋久島は非常に風光明媚な所です。バブル経済のリゾートブームだった時代の前後で、ロープウェイ計画や周回林道の拡幅工事計画が開発の動きがありました。私のことをご存じない方も多いと思いますが、私は国の道路政策を批判した『道路整備事業の大罪』という本を書いたことがあります。そのような本を書いた経緯で、屋久島を周回する国道整備に関して強い関心を持っていました。結果的

に、ロープウェイ計画や周回林道の拡幅工事計画を廃止することになりました。その重要なキーパーソンだったのが、兵頭昌明さんと理解しています。

その後、児童が急減していた母校である一湊小学校に、留学制度を導入しました。屋久島の良さをしっかり守るために活動してきた方です。本日は、兵頭さんに振り返ってもらい、守ってきた屋久島の良さについて語ってもらいたいです。兵頭さん、私の説明で足りないところがあれば、ご自身で補足してください。

私も 2 月に兵頭さんに会って話を聞き、とても感銘を受けました。そういったこともあり、私だけが聞くのはもったいないということで、このような形で皆さんにも共有する機会を設けた次第です。兵頭さん、よろしくお願ひします。

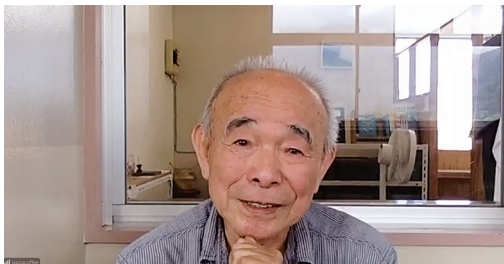
兵頭 私は兵頭昌明です。屋久島生まれの屋久島育ちです。高校を卒業するまで屋久島で育ち、上京後は羽田空港で航空気象業務に従

事しました。1971年に再び屋久島に戻り、『屋久島を守る会』を立ち上げ、屋久島の在り方についてさまざまな問題提起をしてきました。

私が屋久島に帰ろうと思った一つのきっかけは、ある大学の学園祭を見た先輩が「兵頭君は屋久島の出身だったよね。屋久島のことに活動報告をしていたよ」と言われて、その大学の文化祭に行きました。その大学のワンダーフォーゲル部の人たちが、屋久島に遠征した成果を発表していました。ちょうどその年は、縄文杉が発見された年でした。

いかに屋久島が素晴らしいかを紹介しながら、発表の最後には、この素晴らしい自然を守るために、人間の生活を屋久島から取り除くことが必要ではないかという問題提起をしていました。

それを見たときに、私はとてもショックを受けました。屋久島には、昔から「山に10日、海に10日、里に10日」という言葉があります。ひと月30日のうち、山で10日、海で10日、里で10日というサイクルの中で生きるという意味です。自然とのつながりの中で、人はどのように生きていくべきかが示されています。そのようなものに従って私たちは生活を営んできました。いくらこの屋久島の自然が素晴らしいからといって、人間の生活を取り除くという発想を持つ人がいるこ



とにショックを受けました。これは困ったことだと思ったことがきっかけで屋久島に戻って来ました。

それから私は、さまざまことをやってきました。何よりも屋久島のことは屋久島の人間に決めさせるべきだと基本的に考えています。屋久島のことを決めるのは屋久島の人間であるにもかかわらず、屋久島の人間の意思が全く反映されない開発計画が進められることに、いたたまれない気持ちになりました。周りの皆に呼び掛けて、屋久島を守る会を立ち上げました。屋久島の山は、ほとんど国有地です。林野庁は10カ年の事業計画案を作り、山の伐採を繰り返してきました。

当然、その計画の策定に当たっては地元住民の意見を聞きますが、住民はほとんどタッチできませんでした。行政の中では地元議会と町長の同意が必要とされますが、形だけの問題で終わっていることがいたたまれなくなり、屋久島を守る会を立ち上げました。屋久島のことを決めるときは、私たちの意見も聞いてほしいということを基本とし、10カ年の事業計画案に待ったをかけて、私たちにものを言わせるための運動を始めました。

いろいろなことがありました。現在、国立公園の原生自然環境保全地域の指定を受けている場所もそうですが、気が付いたときには、事業計画案が私たち住民の頭を素通りして、既に林野庁の計画として決定していました。それには、地元町長の同意も添えられていました。本当に同意を得たのか、そうではないのではないか、どのようにすればその決定をつぶせるかということから運動を始めました。

人を取り除いて島を守ることは、それはそれでいいかもしれませんが、先ほど言ったように私たちにとって屋久島は、先祖代々から

「山に10日、海に10日、里に10日」と言われてきました。

屋久島に昔から歌われている民謡に『まつばんだ』という歌があります。その中に『屋久の御岳を愚かに思うなよ 金の蔵よりなお宝』という歌詞があります。それを現在の貨幣価値で伐採する事業計画を進めていいのか、私たちが果たすべき役割があるのではないかと思ひ始め、その計画はどのようにすれば中止できるかという運動に取り掛かりました。

屋久島を一周する道路があります。西側の西部林道を拡幅し、その沿線の樹林を伐採する計画を阻止しなければいけませんでした。最後のとりでとして、東京にいる若者たちにも呼び掛けて、ビラを作って来てもらいました。しかし、地元にいる若い人たちからは、「東京でぬくぬくと暮らしながら何を適当なことを言っているのか、山を眺めて飯が食えるか」と批判を受けました。

私たちが変えようと『屋久島を守る会』をつくりました。前進は「屋久の子会」という屋久島出身、東京在住の若者グループです。10人以上が帰って来て、その人たちを中心に島の自然保護活動として立ち向かいました。しかし、国が相手なので私たちのような人間が声を上げても、期待をかけても相手にしてもらえない話ではありませんでした。直接相手にしてもらえませんでした。とにかく丁寧に、一つずつ立ち向かいました。例えば、縄文岳にロープウエーを掛けて、年寄りも子ども皆がロープウエーで行ける施設をつくる計画がありましたが、そうではなく、自らの足で登って行く途中が大事です。

あるいは、国家石油備蓄構想もありました。中東から運んできた輸送船に、帰りは屋久島の水を積んで輸出する計画でした。他に

も、国内の大手企業が中心となり、屋久島のヨットハーバー構想が提起されました。本当に油断も隙もありませんでした。

屋久島は、ご存じのように日本で最も雨量が多い所です。島の面積に対する平均高度が最も高い所から降った雨が流れて来る河川は、恐らく100本以上あるでしょう。伐採すれば、降った雨が集落を襲うので、今まで起きなかった水害が起きてしまいます。私たちがここで生きていくことすらも否定されていると訴えました。初めは何を言っているのかと言っていた人たちが、徐々に私たちの訴えに耳を貸してくれるようになっていきました。時間もかかりましたが、最後には国の決めた10カ年の事業計画案を白紙撤回させることまでできました。

国会でも、各党を代表する人たちが代表質問で屋久島のことを取り上げてくれ、ついには、国を動かし、林野庁の伐採計画を白紙撤回させることまでたどり着くことができました。

わが家は屋久島に移住して100年になりますが、もともと家業は、山の仕事をしていました。親きょうだいからも、「おまえも今まで暮らしてくるまで、山で食ってきたんじゃないか。それを『切るな』なんてばかなことを言っているのか」と言われました。まずは親から説得しなければいけませんでした。仲間が1人増え、2人と増えていき、「やっぱりおまえの言うとおりのだ」とサインしてくれる人が増えていきました。

兵頭 屋久島を守る会をつくったときに、私たちは『島の国有林の即時全面伐採禁止』をスローガンとして掲げました。「おまえ、ばかじゃないのか。即時全面伐採禁止すれば屋久島の経済が成り立たないじゃないか、何を

言ってるのか。寝言を言うのはいいかげんにしろ」と言われました。そのような立場に立ち返れば、当然の反論です。

伐採すれば、取り返しがつかないことになる、取り返しのつかないことをやろうとしていると考えたときに、何が何でも実現しなければいけない、やり遂げなければいけないと言いついたのは4、5人の若者でした。スローガンを確認しながら進めていく中で、いろいろな先輩がたに呼ばれました。

『恵命我神散』という生薬を製造している恵命堂の、創始者である柴昌範さんに呼ばれました。「よく来た。おまえたちのような若者が出てくることを俺は待っていた。この山の木を切ることは、神の手足を切るに等しい。俺は若い頃からそう言い続けてきた。金が必要なら言え。それだけは守る。金は出してやる」と言ってもらい、物資と金の両面から全面的に協力してもらいました。本当にありがたかったです。

このように話をしながらも、今でも思い出します。遅くまで街頭に立って訴えている私たちに、「本当はおまえたちに協力してあげたいけれども、親戚きょうだいいろんなつながりの中でそういうことは言えない。だけど頑張れよ」とおにぎりを差し入れてくれるおばあちゃんも現れました。これはやり切らなければいけないと、皆で思いを定めました。非常に厳しい戦いでしたが、目に見えて応援してくれる人たちが増えていきました。本当にありがたかったです。

当然、山は国有林なので県営の問題です。ここで話をしていることと懸け離れた形で、国家事業予算の問題です。私たちは東京まで出掛けて行き、出身の先輩たちを頼りながらさまざまな人脈をたどって、国会議員へ働き掛けました。右から左まで働き掛け、当時の

予算委員会では、何が始まったのかと言われました。各党を代表する人たちが毎日のように、南の果ての屋久島の国有林の経営について質問してくれる現象も出ました。

中でも、今でも忘れられない人がいます。知り合いから、この人は面白い人なので会ってみないかと言われました。私たちはどのような人か分からずに会いました。その方は屋久島が好きで、知り合いが屋久島にいたので、お正月には屋久島に来て真冬の海で海水浴をすと言っていました。一緒に入らないかと言われましたが、私は「勘弁してください、海には入りません」と言いました。その人は四元義隆という方です。血盟団事件に参加して逮捕された方です。鹿児島県出身で、私たちは田舎者だったので後にそのような方だったと知りました。

とにかく、自民党の右派の議員への影響力が大きい人で、全面的に協力してくれました。トップは農林水産省なので、お役所関係に陳情に行くときはなかなか会えませんが、四元先生を通せば必ず会ってくれました。本当に右から左まで、世の中にはちゃんと核心に迫れさえすれば何事も通じることを経験しました。それからの私の生き方、私たちの仲間の生き方は、その経験で決められたようなところがありました。

頭から決め付けてやるのではなく、どのような人間でもきちんと筋を通せば不可能なことはないということを体感しました。

そういう意味では、学の世界にもいます。表にはあまり出なくても、きちんと見ている先生がたもいることがよく分かりました。政治の世界でも何の世界でも、きちんとしたことに近づいてさえ行けば、どのような人でも耳を貸してくれることを経験してもらいました。初めは、このような離島の片隅から

4、5人の若者がやり始めたことが国を動かすとは思っていませんでした。新聞社のかたがたも本気で記事にしてくれる人たちがいました。

朝日新聞の『天声人語』を書いていた荒垣秀雄さんは、1月2日の『天声人語』で、空から朝日新聞の社機で屋久島を見てきたと書いています。この山の自然がとんでもない岐路に立たされている。この島は人類の宝なので、なくしてはいけなく書いてくれました。『天声人語』の影響力はすごいと思いました。田舎から出てきた私たちに対して、そのような方たちが頑張れと声を掛けてくれたことは、本当にありがたかったです。

それから後に、植物の全国自然保護連合や自然保護協会等の大会に呼ばれたときは、いつもその話をいろいろな人にしました。本気になってやれば、どのような小声でも必ず受け入れられると言いつつながら運動をしていると、さまざまな著名の人たちが力を貸してあげましょつと言ってくれました。

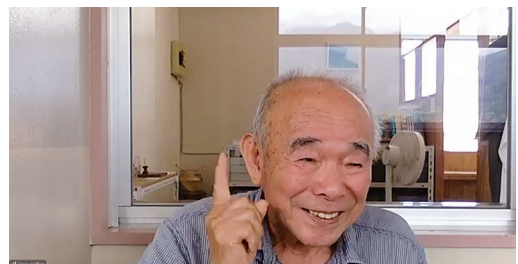
「自分の言う通りにすれば成功する」と寄ってくる人には、「私たちのことは私たちがやるので、ご遠慮ください。ご高説を賜ります」と偉そうなことを言いながらやってきました。そのような人たちから見れば、田舎の若造が何を言っているのかということだったかもしれませんが、慣れました。さまざまな動きや仕組みも、離島の片隅にいながらひしひしと感じさせられました。

最初に自然保護連合の大会に出て話をするように言われたのですが、そのときの大会のスローガンは『きれいな花は摘んで帰ってはいけません。見て帰りましょつ』でした。正確なことは忘れましたが、それを取り上げて話をしました。子どもたちが素直な気持ちできれいと言って、摘んで帰るぐらいの余裕

がある自然ではいけないのか。そのようなけちくさいスローガンがありますか、やめてしまえと言いました。子どもたちがきれいだと言って花を摘むことは自然な行為です。それをとがめるような話ではない、それは自然保護ではないと言ったので物議をかもしましたが、私はその思いで今日までやってきました。

人の力というのは、メディアにしても政治にしても個々の力です。私たちは田舎者なので先入観がありません。なぜこの人がと言われましたが、その人がそれほど有名な人だったということは、後で聞きました。私たちは先入観がないのでそのままぶつけると、それなりに受け止めてくれるということをもつて知ることができました。人には言葉や心があるので、本気でぶつけます。本気でなければいけません。本気でぶつかれば、本気で応えてくれることを、運動を通して本当に得ました。さまざまな形で、身近な人からこの人がと思うような人まで、それぞれにそれなりの関わり方を持ってもらいました。ありがたかったです。

当時、屋久島には学の世界でサル研究者がいました。京都大学には、自然環境の中における野生ザルの生態を研究している霊長類研究所があります。屋久島西部地域は、屋久島の海岸部では唯一、世界遺産地域に指定されています。小さな民家を借りて、数名の



学生が交代で詰めて野生ザルの生態を研究している京都大学野生動物研究センター附属屋久島観察所があります。

餌付けして生態を研究するのではなく、人間を自然の中の一つの生物として、野生ザルに認めさせる関係性を基本にして研究しているグループです。当時の研究者だった学生は偉くなりました。日本学術会議の会長だった山極壽一先生は、当時の研究者だった学生でした。後に、彼は国を相手するときに非常に力になってくれました。今でも励ましの言葉を掛けてくれます。そのような人たちとのつながりは助かりました。先入観なしにぶつかっていくと不可能なことはないということはありませんが、扉が開かれないことはない、これまで活動してきた感想です。こちらが本気になれば、必ず道は開けると思っています。本気度が中途半端であれば、そのまま中途半端で終わってしまいます。この島は、そのようなことを教えてくる島だと思っています。

先ほど、ヨットハーバー構想が持ち上がったと言いましたが、結末は劇的でした。ヨットハーバーを造るためには、その地域の海域の漁業権を放棄しなければ、漁業権がある限りヨットハーバーを造ることはできなかったそうです。漁業権の放棄に関する漁協の総会が開催される前に、行政とヤマハ発動機が一緒になって各漁民を説得して回り、総会ではほぼ過半数の漁民は賛成したとまとめてしまいました。

どうするかと思ったときに、私は1人の漁民に総会に来てみないかと言われたので行きました。実はその人は、出稼ぎで出航していた第五福竜丸の乗組員で、ビキニ環礁で行われた水爆実験の際、ビキニの灰をかぶった人でした。「この話は絶対につぶしてみせる

から諦めるな」と言われました。

私たちは総会の席上には上がれないので、大丈夫かなと思いつつ窓の下で聞いていました。行政は過半数の賛成を押さえたつもりで、業者と着々と話を進めていました。そのとき彼が手を挙げ、「漁業権というものは、どういう権利だ」と言いました。「代々培ってきたものではないか。俺たちがここでこの権利を放棄すれば、今後、子々孫々まで顔向けできないぞ。それでも本当にいいのか」と涙を流しながら、とつとつと訴えました。今でも忘れません。

「ここに来るまでに、委任状を出したのは何人いるか。漁業権を放棄するか、しないかを決めるために、挙手でするとはとんでもない話だ」と、1人ずつ名前を呼んで起立して決めるように言いました。行政は困りました。それほど大事な権利だと彼は説得した結果、皆はそうだと納得しました。

行政は、説得して漁業権放棄に過半数の賛成を得たはずでしたが、全部反対に回ってひっくり返されたので諦めざるを得ませんでした。本当に劇的な瞬間でした。屋久島の歴史の中でも、一つの特筆すべき歴史だと思っています。サイトウさんは、いろいろな意味で私たちをバックアップしてくれました。ビキニ環礁での被爆の状況をふまえた上で、「とにかく屈してはいけない、おかしいことはおかしいと言え」というのが口癖でした。そのような人たちの助けを得ながら、本気になってやれば大概のことはできます。物事の本心に迫らなければいけないということを経験しました。それからの私自身の生き方にも影響し、今日に至っています。何も変わらず、好き勝手なことを言っています。

屋久島を守る会では、山を切るなど訴えていました。当然ながら林野で働く人もいるの

で、全林野関連労働組合の人もいます。その人たちが全国林野関連労働組合として伐採に賛成すると言いました。気が引けたのでしょうか、『生活を守る会』を立ち上げて国有林経営は続けるべきだと活動を始めました。

私たちは木を残すべきだと主張し、あなたたちは木を切るべきだと主張するのであれば公開討論会をしましょうと、公開討論会の申し入れをしました。

林野関連労働組合側は、大型バスを使って動員をかけやって来ました。私たちはパラパラでしたが、討論会では、今も大事だけれども子の代、孫の代、その子の代、孫の代まで真剣に考えてやっていきたいと思います。討論会には外から来ていた若手の人たちもいて向こうは多勢に無勢だったものが、その場では完全に逆転してしまいました。考えつくいろいろなことをしました。ちょうちん行列もして、半分こちらは楽しくやりました。

服部 ちょうちん行列とはどのようなことですか。

兵頭 ちょうちんに『伐採禁止』と描いてもらい、ちょうちんを持って「山を切るな、屋久杉を残せ」と言いながら皆で町を練り歩きました。こいつらは何を始めるのかという感

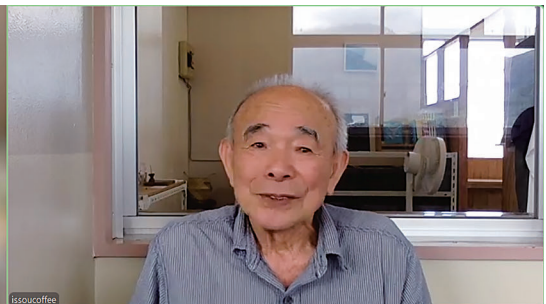
じでした。

石油備蓄基地でもパレードをしました。南のほうの地区の候補地だった所に動員がかかって、賛成派の人たちが期成同盟みたいなものを開催しました。私たちも呼び掛けて、石油備蓄基地だなんてとんでもないと、シュプレヒコールをしました。考えつく限りのことをやってきました。

結局、地元の屋久島のことなので、屋久島に決めさせると問い掛けてアピールした声は、しっかり届きました。ロープウエー計画もそうでしたが、石油備蓄基地の件も、芽を摘んでいくことができました。計画が挙がったときに反対する人はほんのわずかでも、やっているうちに賛同してくれる人は増えていきました。

目に見えない形で、皆が賛同してくれました。お年寄りの方たちも、「私たちにはできないので頑張れよ」と声を掛けてくれました。頑張らなければいけないと思いました。たまにあいさつをするぐらいの関係の人たちがそうやって声を掛けてくれたので、本当にありがたかったです。だからやってくることができました。目には見えない、表には出ないところでそのような支えは絶対にあると、確信が持てました。

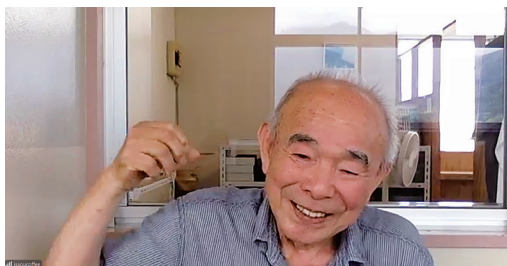
屋久島を守る会を立ち上げたときは、名簿を作らないことにしました。会員名簿を作っ



てしまうのではなく、全島民が屋久島を守る会の会員だと思っています。横着な話です。思うことは勝手なので、名簿は作りませんでした。会員は何人ですかとマスコミの取材で聞かれても、全島民が会員だと思っていると答えていました。

屋久島を守る会の運動の延長線上で、山尾三省という詩人がいます。日吉眞夫もいます。彼らは外から屋久島に来ていて、ヒッピーなどと呼ばれ島々のいろいろな所に移住していました。私たちはそのような人からの人たちと関わりを持ち、将来的には自治体がすすめた山の問題10年計画を白紙に戻しました。

そのときも、それをどうするかということになりました。山で働いている人たちもやはりきちんと問題を提起するべきではないか、変わるべき産業を私たちは問題提起しなければいけないのではないかとということで、私たちは勝手に『屋久島産業文化研究所』という名前を付けて研究所を立ち上げました。春夏秋冬の季刊誌『生命の島』を全国レベルで刊行し、いろいろな方に寄稿してもらいました。屋久島の中にあり、なおかつ、まだまだ可能性がある物産もあるのではないかと、最初にパッションフルーツを取り上げました。地元の間は皆、おいしいので食べていましたが、一般的にはまだお金になる時代ではありませんでした。



一緒に活動している若手に現金を渡し、「これでパッションフルーツを買って来い」と買いに行かせました。季刊誌を通して全国にPRしました。1年目は押し売りみたいな感じでしたが、2年目からは注文が殺到してパッションフルーツブームが来ました。屋久島の南の島々は全部その影響を受けて、パッションフルーツを作り始めました。パッションフルーツは個人的に食べるような果物でしたが、今や全国的になりました。とにかくお金になるものは何でもいいので金にしたいと思っていました。

兵頭 季刊誌を作ったときもそれがどのようなものになるのか分からないので、言い出しっぺの何人かが今年来た年賀状を持って集まりました。年賀状をくれた人を読者にしよう、半ば強制的に、先払いでいいから読者になってくれと言いました。

うれしかったのは、私の友達は10年分先払いしてくれました。その代わりに、10年間は作れと言って10年分の約束をしました。うれしかったです。これはやめられないということで、編集長の日吉眞夫が亡くなるまで23年続けました。窮すれば通ずと言いますが、そうではありません。どのような人間でもどのような場面でも、窮すれば必ず解決策はあります。間違いなくあります。それを私たちは実感しています。

島の片隅の若い連中が、国有林経営の10年計画を回避させることができたのです。良識のある大人たちは、「おまえたちは寝言を言ってるんじゃないか。そんなのできるわけねえじゃないか。国会で予算は通ってないじゃないか。産業計画をおまえたちに言われて変えられるわけじゃないか」と言いました。ところが、変えてみせたわけです。面白

かったです。

兵頭 妻は教員採用試験を3回受けました。私が東京にいた頃は鹿児島県の教員をしていました。結婚することになり東京に出てくることになりましたが、私の安月給では生活できないので、東京都の採用試験を2回受けました。後に屋久島に帰ることになったので、採用試験を3回受けました。「3回も教員採用試験を受けたのは、恐らく私ぐらいだよ」と本人は笑って言っていました。私がやりたい放題でかい性がないばかりに、妻の内助の功のおかげでした。

東京時代、妻が務めていた中学校に、長野出身の青木厚志先生という校長先生がいました。その頃は日本全国の中学校がとても荒れていました。妻も早く家を出て、駅前で遊んでいる小学生や中学生をつかまえて学校に連れて行って行っていました。青木先生は、これではいけないと自分の出身地の長野県に働き掛けて、荒れている子どもたちを家庭に留学させました。青木先生は後に、公益財団法人育てる会を立ち上げて、山村留学を始めました。その活動を見ていて感じるころがありました。屋久島に帰ると、逆に屋久島には子どもたちがいません。吉田小学校はなくなり、志戸子小学校もなくなり、一湊小学校に統合されました。いつなくなるか分からない一湊小学校が目前にありました。何とかしなければいけないと町に働き掛け、留学制度を始めました。

服部 私たちのように屋久島の住民ではない者からすれば、世界遺産に登録されたことで、さらに屋久島の知名度が上がったと思います。世界遺産に登録されたということは、先ほど言っていた屋久島のことは屋久島が

決めるということと反すると思いますが、その辺りはどのように考えますか。難しい問題かもしれませんが、兵頭さんの意見を伺えますか。

兵頭 別の話があって環境ガバナンスの話の前に委員会ができましたが、私はタッチしませんでした。ただ、委員会から声が掛かったけれども入ったほうがいいかとC.W.ニコルから連絡がありました。自分は屋久島のことを分からないがいいかと言いましたが、反対派も屋久島のことを分からない人ばかりだと私は言いました。そして、あなたが委員になることで発言できるので、認定されたときは完全にバックすることは約束すると言っていると、彼は委員を請けてくれました。

彼は屋久島にレンジャー学校をつくるのが夢でした。日本のレンジャーを養成する学校をつくるのが夢でした。

後の東京環境工科専門学校です。

兵頭 学校をつくりたいと言っていました。国として賛同できないということで実現できませんでした。屋久島の環境は山があって川があり、海がある、レンジャーを養成するためにもこのような素晴らしい環境保全の条件がそろった所だと言っていました。

兵頭 世界遺産についてもいろいろなことがありました。ある意味、世界遺産は後からくっついてくるというか、最初のメンバーの選考からどうもうさんくさかったです。屋久島に根差した人ではありませんでした。東京でつくるのであればいいが、屋久島にはどうなのかと思っていました。

世界自然遺産は、日本全国のいろいろな観光地に施設をつくるリゾート構想の中の一

つの手法という側面を持っていたので、うさんくさかったです。企業が大きな役割を占めていくので、とてもではないけれども私たちは支援できないと思いました。

国有林の場合は第1種、第2種、第3種があるので制限があれば変わっていきます。菌止めを掛けられるようなものが必要です。原生自然環境保全地域の指定を取って国有林を経営するので、それをうまく利用していけばいいです。その場合、開発に必要なだと言いつけていくためには人間の意思を問います。

先ほど話をしたように屋久島は、これだけ山が高く雨が多く、河川も多いです。全ての源は川の水です。川です。全部一点に集中できるので、屋久島の環境問題は川です。宮之浦の水道の水源地は白谷雲水峡の事務所の下流です。

事務所前にはトイレがあります。

兵頭 確か、そのトイレは百人槽です。そこから下り、宮之浦の水道の水源地があります。もう少し言えば、私たちはトイレで用を足した後の水を飲まされているのです。屋久島を考えると、このことを忘れずに考えなければいけません。自然保護の話ではなく、あらゆることの根源です。命をつなぐ考え方とは、絶対に河川を汚染させていけません。公衆トイレにしても、河川の水源地の

上にトイレを作らせてはいけません。

当時は、日本中のトイレメーカーが、わが社のトイレを使えばこれだけきれいになると言って、無償で屋久島に設置したトイレもあります。そういう意味でも、宣伝効果は抜群です。冗談ではありません。実験場ではないと言いつけました。

さまざまな日本の基準は、屋久島には通用しません。これだけの雨量はないので、それを踏まえた上で考えてくれるのであればいいですが、ただ薄めればよいという話ではありません。

日本は照葉樹林文化です。日本列島は照葉樹林で成り立っていました。辛うじて、屋久島にはその場所が残っています。海から川は照葉樹林ばかりです。照葉樹林から水について日本人が学ぶべきことは、この島を置いて他にないと思います。そのように位置付けます。今のやり方にしても、もう少し考えてしかるべきです。

そういう意味で、屋久島は研究、学習の場でなければいけません。ここしかありません。水問題を考えるときに、屋久島を見て他の所でやってもしょうがないです。屋久島だからできるのです。そのような役割も屋久島にはあります。

服部 兵頭さん、心強くなるような話をいた



できました。あらためて感銘を覚えて聞かせていただきました。ただ、日本ではなかなか守れません。例えば、北海道の二風谷ではアイヌの聖地がダムになりました。萱野茂さんは国会議員になってまで反対したけれども、結果的にダムは造られました。沖縄の竹富島でも、集落の伝統的なものを守る条例まで作ったけれども星野リゾートのホテルができて、なかなか守れなかったところがあります。そのような中で、屋久島が守ることができたのはとても心強いけれども、どこが違ったのでしょうか。

兵頭 最近はあまりありませんが、修学旅行で来る子どもたちに話をすることがありました。そのときの決まり文句で「屋久島に来た目的は何ですか」と言うと、「屋久杉を見に来ました」と言いました。他にも、自然環境がきれいだから、川や海がきれいだからと言っていました。私は、あなたがたに見てもらいたいものはそのようなものではないと言いました。何かというと、あなたたちが毎日学校へ通っている道にもいろいろな植物が見えているはずなので、本気になって見て、探して見てごらんと言いました。

そして、せっかく屋久島に来たのだから、屋久島の歩道の石と石の間に生えている雑草の一つ見ても、これはいつも学校に行くと

きに生えている草だと見つけることができれば、あなたがたの住んでいる所も世界自然遺産に指定に匹敵する、そのような場所なのです。そのようなものを発見してもらうために屋久島があるので、その役割を果たしてもらいたいです。帰ったときに、自分の家や学校の周りを見て、一つでも屋久島で見てきた植物が見つかるような体感をしてほしいという話をしていました。そのようなことだと思います。東京にいても可能です。どのように見るかの問題です。

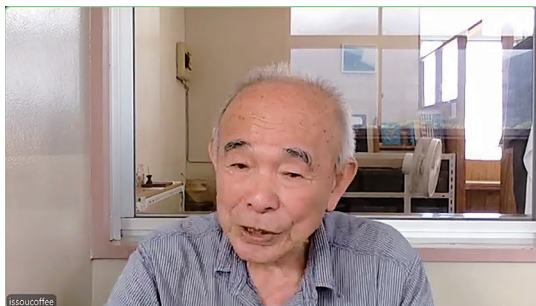
服部 とても哲学的です。

兵頭 子どもたちは素直なので、屋久杉の話よりそのような話のほうが入ります。あなたたちの場所でも世界自然遺産に匹敵する場所があるはずですよ。屋久島で見た植物や木を探してほしいと言っていました。

服部 大変ありがとうございました。あと15分間ぐらいなので、質問を受けてもよろしいですか。

兵頭 はい。

服部 とても貴重な話をさせていただきました。私もこのような講演会を企画できて大変



櫻井あかね氏

うれしく思います。兵頭さんの今の話や、屋久島に関連して何か質問があれば受け付けます。

兵頭 どのような質問でも結構です。

服部 私でも分かりますか。挙手してもらっても構いません。何か質問はありませんか。

兵頭 便利になりました。

服部 最初は兵頭さんに京都まで来てもらいたかったのですが、さすがにそれはできませんでした。皆さん、大丈夫ですか。櫻井さん、何か質問があるのではありませんか。

櫻井 大学院生が質問したほうがいいのではないかと思って、待っていました。質問してもよろしいですか。

兵頭 はい。

櫻井 屋久島は世界遺産ということが真っ先に思い浮かびます。自然を守ってきた歴史の話の聞けるということで、この講演会にとっても関心があり参加させてもらった櫻井です。伐採計画を反対していた中でも、遊び心がある活動だと思いました。反対を声高に叫ぶと、島民の中でも反対の人と賛成の人と分かれてしまいます。住みづらくなり、人間関係に響いてくると思います。兵頭さん自らが楽しむための要素を積極的に取り入れてきた活動だったと思いました。それは意識的にしてきたのか、今でも大切にしているのか、どこからその発想は生まれたのですか。

兵頭 今でもやっている活動が一つありま

す。『山ん学校』という活動です。山ん学校とは何かというと、昔、子どもたちは学校に行くときに行って来ますと言って家を出ても、学校へは行かずに山に行き、1日遊んで帰って来ました。「きょうはちゃんと勉強したのか」と言う。「はい」と涼しい顔で勉強したと言うので、「きょうも山ん学校か」と言っていました。

山ん学校の参加資格は誰でも構いません。1日目は、山へ行きます。2日目は川を体験します。3日目は海辺を体験します。1日目は入校式を行い、入校式後に参加者した子どもたちに肥後守（ひごのかみ）を1本ずつ配布します。それを川と山に持って行き、青竹を肥後守で削って箸を作ります。刃物を扱った後は、かまどを作って飯ごう炊飯をします。その晩は1人一つずつテントを与えて、自分たちでテントを張って寝床をつくります。

3日目は海岸近くで、打ち寄せられて来た木を拾って来て、火をおこします。海水をくんできて、塩をつくります。火を絶やさないように一晩中たき続けます。できた塩をお土産に持ち帰ります。刃物を使って火をたき、塩を作ることができれば、どのような所でも人間は生き残ることができます。この三つさえできれば、どのような場所でも生き残ることができるのでやってみようという話をしながら、子どもたちを対象に今でも活動を続けています。火をおこすためにマッチ箱を1箱使っても火が付かないこともありました。面白いです。

とにかく、遊び道具も全て自分たちで手作りしなければいけない世代でした。夏休みは、朝に家を出たままほとんど帰って来ませんでした。食べるものは山にあるので、何が食べられるか先輩たちが教えてくれました。

昼ご飯は山で食べる暮らしをしていました。本来、そのような体験を子どもたちにさせたいという思いがあるので、山ん学校をやっています。

遊びが屋久島を守る会の原点です。

人生そのものが遊びみたいなのです。

山ん学校の卒業式では、その辺りの河原で石を拾って来て、『遊び』と漢字で書き、卒業証書として子どもたちに渡します。

服部 滋賀県環境生協の藤井絢子さんも遊び心満載です。遊び心がある人が、環境を守るような運動をリードできるかもしれません。守らなければいけないと厳しくするよりも、遊び心的に楽しく運動を展開できる人が仲間を集めることができ、結果的に成果を出す気がします。

兵頭 地元の学校から、肥後守を持って学校に行く子どもがいると抗議が来ました。

兵頭 そういう意味では、今の子どもたちはこれをしてはいけない、あれをしてはいけないと制約ばかりで、いかに安全に刃物を使うか、管理するかを教えられません。

櫻井 ありがとうございます。

服部 他に何か質問はありませんか。大丈夫ですか。私から発言します。西部林道が守られたことは、失礼ながら意外でした。国の道路局はすごく力があるので、反対運動のほとんどを駆逐しています。国が道路を造ると言えば、ほとんどの場合は造られるパターンなので、よく計画を撤回できたなど、前から気になっていました。何が計画を撤回させられたのですか。

兵頭 あの問題については、国を動かさなければいけません。例えば、地元の政治家は必ず利害があるので、鹿児島県出身の政治家はこの問題には一切タッチさせませんでした。

服部 政治家には必ず道路局の人がいます。

兵頭 利害関係があるので、公平な目でのものを見ることができません。もう一つは、各党の中には、共産党から自民党まで必ず分かってくれる政治家がいます。それを探すことです。とんでもない政治家が介入してくれました。

特に、参議院議員連盟です。おまえたちはどのようなことをやったのかと言われるぐらい、それこそ自民党から共産党まで、小さな縁をたどって政治家を一生懸命に口説き



協力：高田みかこ氏（一湊珈琲編集室）

ました。やはり、国政を目指そうという人たちは、いろいろ言っても基本的に思っているもので、そこをくすぐりました。

政治家は表立っていますが、実際には秘書が力を持っています。国会議員の秘書は、意外にいけます。秘書グループがあります。

秘書を集めた説明会を大々的にしました。

麴町の施設で説明会を開くと、共産党から自民党まで先生がたが並んでくれました。

そのときは、メディアの人が手伝って集めてくれました。

兵頭 やはり政治家を目指そうという人たちは、私たちが活動しているような思いを本質的に持っています。国政に参加しようと言っているけれども、至心はなかなか国政には届きません。そのようなものを持っている人です。「兵頭さん、よくあんな人を口説いたな」と言われましたが、そうではないという話はいつもあります。

服部 分かりました。兵頭さん、ちょうど時間になりました。きょうは本当に貴重な話をしていただき、ありがとうございます。

兵頭 とんでもないです。

服部 素晴らしい話でした。課題があるので、課題のレポートを送らせてもらいます。

今回の講演を聴衆した人の多くは、屋久島にまだ行ったことがない方が多いようなので、そういう意味ではこれを機会に、ぜひとも屋久島に行ってもらいたいです。日本に屋久島があることは素晴らしいことだと思います。先ほども言いましたが、屋久島は山もあるし海もあるし川もあるので、何でもあるような所です。標高も九州では一番高い山があるので訪問してもらいたいです。

兵頭 山や海や川も結構ですが、若者に伝えたいことがあるので、必ず年寄りをつかまえて話し掛けてください。どのような年寄りも百科事典が歩いているようなものです。

服部 分かりました。

兵頭 それを使わない手はありません。

服部 きょうは、とびきりの百科事典に出演してもらいました。ありがとうございます。大変勉強になりました。時間になりましたが、櫻井さん、何かありませんか。大丈夫ですか。これで終わります。どうもありがとうございました。兵頭さん、ありがとうございました。これでオンライン講義は終わります。失礼します。

(2025年6月21日)

2025年度（第2回）

龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム 公開講演会

「『市民こそが公共』から始まった 地域公共人材」

龍谷大学名誉教授
富野 暉一郎

富野暉一郎（とみの きいちろう）

1944年逗子生まれ。京都大学（宇宙物理学科）・東京大学大学院（理学系研究科）博士後期課程中退。

1982年より市民運動（池子弾薬庫跡地（逗子市）への米軍住宅建設に反対）の中心的メンバーとして活動。1984年に逗子市長に当選し、3期（8年）市長を務める。高根大学法文学部教授を経て、1999年より龍谷大学法学部教授。

2011年の龍谷大学政策学部・政策学研究科設置の際には、同学部・研究科の理念や目的、中心コンセプトの明確化、教育課程の具体化などに尽力した。2016年より2020年3月まで福知山公立大学副学長。



■はじめに■

今里 皆さん、こんにちは。先進的地域政策研究担当の今里と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

定刻になりましたので富野暉一郎先生のご講演会（※1）「『市民こそが公共』から始まった地域公共人材～龍谷大学政策学部・研究科創設の10年を振り返って」を始めさせていただきます。この講演会は先進的地域政策研究の講義の一環として行われますので聴講者を受講生に限定するという選択肢もありましたが、いろいろな方にお聴きいただきたいと公開の講演会として企画しました。富野先生には市民的公共性、地域公共人材、イノベーションといった内容でお話させていただきます。

龍谷大学では2011年4月に政策学部と研究科が同時に開設され、2015年3月には最初の学部卒業生が誕生、同窓会がスタートしています。この同窓会も今年で10周年を迎

え、来たる10月11日に記念イベント「龍谷政策 FES 2025」の開催を予定しています。チラシをお配りしましたので、皆さま、ぜひお越しください。

こういったイベントが開催される一方で、政策学部、研究科を立ち上げた先生方は次々とご退職され、白石先生も2026年3月にご退職になられます。そういった中、ぜひ富野先生にお話をお伺いしたいという事で本日は遠方よりお越しいただきました。

富野先生は白石先生、土山先生、石田先生といった先生方と共に龍谷大学政策学部、研究科を立ち上げた伝説の方です。本日は先生方がどういった構想をもとにどのように学部をつくられたのかについても、併せてお話いただきたいと思っています。

富野先生のご略歴については講演会のチラシにもお書きしていますが、京都大学では宇宙物理学科を、東京大学大学院では理学系研究科と理系の学問を修められました。その後経営者として会社を率いられ、1982年からは伝説となっている逗子の市民運動を牽

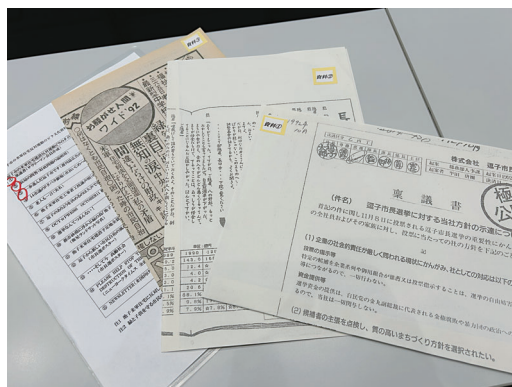
引、さらに1984年からは逗子市長を3期（8年）お務めにられました。そして1999年からは龍谷大学法学部の教授に就任され、お仲間と共に新学部、新研究科の構想を練られ2011年の開設に尽力されました。

本日はこういった伝説の先生のお話を皆様と一緒に聴きたいと思っています。1時間の講演会の後に休憩を挟んで1時間の質疑を行います。質疑では本日ご参集の先生方にもお話をお伺いしたいと思っています。

また、本日の講演、質疑は10月11日の同窓会、さらには白石先生のご退職記念のご講演にお繋ぎできればと考えています。では富野先生、よろしくお願いいたします。

富野 皆さん、こんにちは。久しぶりに龍谷大学に来させていただきましたが、懐かしいお顔もたくさんいらっしゃってとても嬉しく思っています。

本日は資料をたくさんお持ちしました。というのも私がすべてをお話するとなるとおそらく2、3日はかかってしまいますので、本日は龍谷大学と市民社会との関係性に私がどのように関わってきたのかを中心にお話したいと思います。バックグラウンドの部分は話を聞きながら資料をご覧ください、何とか1時間にまとめたいと思っていますの



で、よろしくお願いいたします。

私が「市民」をどのように意識し、どういった形で私自身の核となったのかは、私の生い立ちと深く関わりますので写真付きの資料をご用意しました。後でご覧になっていたと思いますが、一点だけ言わせていただくと、私の人生最初の記憶は生家の真ん前にある池子米軍基地の弾薬庫の大爆発です。当時私は2歳でしたが、爆発で大きな火柱が上がり自宅の障子が吹き飛んだ記憶が頭の片隅に残っています。誘爆で何日も火災が続き、村人は全員強制的に避難させられましたが、当時日本は米軍の占領下にあり報道管制が敷かれていたため、事故についてはほとんど報道されませんでした。

私は市長の時に「みどり、平和、自治」を打ち出していましたが、その際に「自然」をどういうものとして捉えていたのかをお話します。

小学校に入学した時、私には不思議で仕方ない事がありました。皆さんをご存知ないかもしれませんが、当時は校庭に二宮金次郎の像があったんですね。資料2ページに写真がありますが、「私と同じ格好をしている人がなぜ銅像になっているんだろう？」と。当時私は祖父と一緒に山に入って山仕事をしてから燃料の柴を背負って本を読みながら山道を下りていたんです。今、同じ事をする危険だと言われるかもしれませんが、本を読んでも足が道を覚えている。頭でもなく目でもなく、身体が道を覚えているんですね。そういった経験をしているので自然の中で自然と共に生きる感覚は今でももっていますが、自然保護、環境保護とよく言われていますが、自然そのものが私の身体に染み込み、

捉えられている事を先に申し上げておきます。

こういったお話をする時に欠かせないのが、市民運動、或いは市民の力です。私は池子米軍家族住宅問題の際に、安保と自然環境保護が正面からぶつかった事がきっかけで逗子市長になりました。市長として米軍と正面からぶつかりアメリカの大学に行ったりグローバルな行動を展開したりしましたが、市民運動そのものは市民の皆さんが主体となってやった事なんです。そのことを知っていただくために当時ビラをこちらに持って来ました。逗子市では「ビラ文化」といって市民が実名で新聞折り込みにビラを出し、運動したという経緯があります。この「逗子のビラ文化」を知っていただくためにビラのファイルを、私が話している間に回覧していただいて市民の力を実感してください。今見てもまったく色褪せていない事がお分かりいただけると思います。

このように逗子の市民運動は私が指揮をしたりつくったりしたのではなく、市民が起こした運動で、市民の力がどんなに大きく強いものかを感じていただきたいと思います。

■■■ 1. 法学部教員として（1999～2011） ■■■

富野 では、自分の本題に入ります。

今でも私は人生のメインテーマは「自然環境」「市民の力」「地方自治の力」の三つだと思っています。では、龍谷大学の教員に採用していただいて政策学部をつくり、政策学部が様々な活動を続けることに私の経験や思いはどう関係していたのかから話しを進めましょう。

現在、龍谷大学政策学部は社会的にも確立

された教学組織として理解されていると私は思っています。しかし世の中はどんどん変化していきます社会的評価があるからといって安住しては次の世代の社会はつくれません。

龍谷大学政策学部・政策学研究科をつくる過程で私を感じた事、また実際に先生方と共にしてきた事を改めて振り返り、今後の政策学部・政策学研究科の在り方について皆さんと共に考える。これが本講演の趣旨ですが、その中心にはやはり市民がいます。政府は政府、政治家は政治家、企業は企業として、社会の重要な存在ですが、私たちは市民セクターが果たす役割を深く考え行動しなければなりません。その辺りについて皆さんと思いを共有し、今後について考える事ができればと思っています。今日は白石先生、土山先生もいらっしゃるのでお話のサポートをしていただければと思います。よろしく願いいたします。

■ (1) 社会の大学ランクで自己規定していた学生たちを変える ■

私は逗子市長を退任してすぐに島根大学に奉職し、その後1999年に龍谷大学に教授としてお招きいただきました。当時龍谷大学に政策学部はなく、法学部の中にある政治学科の教員として採用されたんですが、講義を始めてすぐがっかりしました。学生に覇気がなく、自分たちに何ができるかを分かっている、分かれようもしない空気が横溢していたからです。

島根大学は地方の大学ですが様々な階層の学生がいました。当時島根県では長男が大学に進学するとなると島根大学に入ります。ところが京都のような都会では頭の良い人

は京大や関関同立へ…といった輪切りのような社会通念があり、輪切りの中のどの大学に入ったのかという所から学生生活が始まってしまいます。輪切りの中の行動、輪切りの中の可能性、輪切りの中の人生が与えられたものという感じがとても強く、講義をしても極端に反応が薄い。学生はとても真面目ですが、質問も弱く反応がない。でも、島根大学はそうではなかったんです。実は地方大学には骨のある学生がけっこう多く、いろいろな事をやらかしてくれます。「これは困った…」という事もありましたが、その中に期待したくなる学生も相当目につきました。

一方、輪切りの中で京大を目指す、関関同立を目指す、でも受からなかったので仕方なく龍谷大学に来たという人たちがある程度いて、彼らは龍谷大学に不満たらたらだったんですね。レベルが低い、あんな授業は取らなくていい、チャレンジできる場がない…と平然と言う学生もいました。こんな雰囲気ならそう思う学生もいるだろう、でもこれではダメだと私は思いました。ただ、言い換えれば不満があるのはとても良い事で、不満を吐き出した次に行動して自分を高め、「龍谷大学には通う価値がある」と思えるにはどうすれば良いのかを考えることが大切です。

そこですぐに「自主ゼミ」を始めました。今で言う「発展ゼミ」はそこから立ち上がったのですが、まず土山先生と共謀したと言いますか、巻き込んだと言いますか、一人でやるより二人でやったほうが良いと勝手に指導教員が二人のゼミを始めました。ゼミの先生は通常一人なので、その先生が言っている事が絶対になってしまいますが、学問や社会問題は常に正解があるとは限りません。だから、違った面から違うコメントや考え方が出れば、それが議論の種になる。つまり学問は

教えられるものではなく、自分たちも一緒に考えなければいけないという事をぜひ知ってもらいたいと、土山先生と自主ゼミを始めました。

するとやはりそういった学生が応募してきてくれるんですね。ゼミの構造は学年を縦型に大学2年生から大学院生までをごちゃ混ぜにして、互いに学び合い教え合う形をとりました。欠席なんてとんでもない、事前学習を徹底的にやっておかなければ先生に突っ込まれて立ち往生する、学生たちも互いやり合うハードなゼミにしました。突っ込み役には最適の土山先生がいてくださったので、とにかく恐ろしいと言いますか、すごい先生がいるすごいゼミになりました。

私は学問に絶対はないという考えなので、二人の先生が違う分野から違うコメントを出してみんなで検討するゼミは、すごく良い学びの場だと思っています。大学院生は知っている事を改めて見返す事ができる。学んだ事を人に伝えるには高度な技術が必要なので、同学年だけの学びの場ではそういった能力は育ちません。2年生、3年生といった学部生は院生からいろいろな事を教えてもらえて学ぶ事ができ、院生は自分たちが教えて情報を提供する事で互いに成長できる。この仕組みは見事に当たり、ものすごく熱いゼミになりました。仕掛けたのは私や土山先生ですが、学生たちはそういった場を求めているのでどんぴしゃだったんだと思います。

ゼミに参加した学生たちはどんどん成長し、最初はまったく関心がなかった周りの学生もその様子を見て、「エッ龍大だって!!」といった感覚があったんでしょうね。徐々にそういった気運が周囲に広がり、法学部政治学科だけでなく自主ゼミに入りたいという学生が増えてきました。私の記憶では自主ゼミ

は2年間だったのですが…。

■ (2) 新学部創設に向けて学内の体制づくり (2001年度) ■

土山 最初の2年間は自主ゼミとして、3年目に法学部政治学科の「地域政策発展演習」という名称で単位化されました。

富野 こういった過程を経て「発展ゼミ」は学部の正式な学びの場となりましたが、その後他の学科を含む学部全体にも一つの形として定着しました。そして学生達の龍谷大学に対するイメージはもちろん、自分自身に対するイメージもだんだん変わってきたと思います。徐々に雰囲気は温かくなって最終的には熱くなっていく。さらに政策学部になってからですが、各ゼミが研究成果を発表してコンペをする事になりました。コンペが良いか悪いかは別として、順位をつける、つまりは競走する訳です。これがすごく加熱してカオス状態のゼミの発表会となり、「やり過ぎでは？」と感じる先生も多くおられたと思うほど熱くなっていきました。

寂しく冷たい学部から熱く激しい学部へ。みんなが夢中になり熱く激しい雰囲気が生まれたのは、すごく大きな出来事だったと思います。大学は教員や大学執行部がどんなに頑張っても、学生の皆さんがその気になって頑張らなければ活力は生まれません。土山先生と二人で最初は「どうかな…?!」と始めたゼミが定着し、新しい龍谷大学の在り方に繋がった。自分自身を褒める訳ではありませんが、そういった経緯があって、大学に発火点をつくれたという事をお伝えしたいと思います。

富野 白石先生は「政策学部は絶対に必要！」と言っておられましたし、私自身もそうでした。皆さんもよくご存知の石田先生は慎重派というか、物事をきちんと筋道立てておやりになる、大学の信頼も厚い方です。私たちには大学からの信頼はたいしてなかったかと思いますが、石田先生は満を持してやる時はやる方なので大学にもきちんと対応していただけますし、土山先生も熱い塊をおもちで触れると火傷する…とても熱意と情熱のある先生です。そんな先生方と一緒に政策学部をつくりたいと思ったんです。

ただ、市長の経験もある私は政治学部にも政治学科にも限界はがあると、龍谷大学で痛感していました。というのも、政治は上からの動きが大きく私が市長の時には「市民自治」という言葉はありませんでした。だからこそ市民が社会を動かす仕掛けをつくる時に政治学でどれだけの事ができるのか、私は常に疑問に思っていました。

そしてもう一つ、法学はもちろん大事な学問です。しかし、学問としての法学の大事さとは別に、現実社会に対してどういった役目を果たし、何をつくり出していくのかは見えにくいと言いますか、新しい社会をつくり出



していくよりは社会の様々な問題を整理して制度化していく方が強いので結果として現実社会の後追いになってしまい、現実社会をつくり出す力になりにくい感覚が強くなりました。私のそういった思いに対してこの三人の先生方は基本的に「そうだよね」というスタンスであって、特に議論を重ねた訳ではありませんが、「やはり政策学部をつくらなくては」という思いで意見が一致したんです。

では実際どのようにして政策学部をつかっていったのか、ですが、私と土山先生にはこの方面のノウハウはまったくなかったので、石田先生と白石先生が中心となって学内での仕組みづくりをはじめとしてすべての事をやってくださいました。私と土山先生は戦闘部隊としてかけまわるという感じでした。

とはいえ、いくつか乗り越えなくてはならない課題はありました。一つは、今となっては信じがたいのですが、当時の政府には「法学部、政治学部はあって然るべし。でも政策学部って必要？」といった風潮があり、政府が学問としての政策学をしっかりと位置付けていなかった流れがありました。積極的にやりなさい、やって良いではなく、我々から強く働きかけていかなければなかなかことが動かない感じでしたね。

もう一つは、「政治学科があるのに行政を主体とした政策学部が必要なのか」と、学内でも学問として十分に理解されていない空気感で、まずは環境づくりから始めなければなりません。深草学舎は法学部、経済学部、経営学部の3学部体制でしたが、他の学部の理解もほとんど得られない状態だったので、石田先生と白石先生は大変なご苦労

をされたと思います。しかし大学からの信頼がとても厚いお二人が高く厚い壁を崩して、政策学部の新設を実現してくださった訳です。

■ (3) 地方自治体・NPO との共同推進体制の構築 (2001年度～) ■

富野 一方、私の一番の課題は「社会との接点をどのようにつくっていくのか」でした。そこで自治体の皆さんを対象とした懇談会のような研究会づくり、神戸市や京都市など10あまりの市に「政策学部・大学院に何を期待し、どのような議題があるのか？」をテーマにお声掛けをし、一年に何回か龍谷大学に集まっていたいき主に大学院のあり方や仕組みについて話し合いました。自治体が抱える課題にはどういったものがあるのか、政策学部をつくれればそういった課題に対して何ができるのか、政策学部ができた際にどういった体制であれば職員を派遣していただけるのかといった内容の研究会を重ねたわけです。

この研究会でまとめられた大学院修士課程の案は、当時としては相当斬新でユニークなものであり、多分文科省側も、龍大の教員にとっても、そして地方自治体やNPOの皆さんにも、地方分権を本格的に進めるための一つの試みとして、ある意味では教育研究の中身よりも興味を持てるものだったのではないのでしょうか。具体的には、1年制のマスターコース、しかも協定型で授業料免除を制度としてもつ大学院、つまり大学院コースになるんですが、地方自治体は当時はかなり政策に飢えていました。高度経済成長が終わり、次は何をやるのか、どうすれば新しい時代に移れるのかといった大きな課題があり、

政策という言葉自体に魅力はありましたが、実際に何をやるのかははっきりしていない時代だったのです。

ただ、2年制のマスターコースに職員を派遣するとなれば2年間も職場に穴が空いて困る。また、職員を派遣するとしても平日に時間を取る事は難しく、基本的には土日になるといった問題が山積みでした。そんな事を言われても大学としては困る訳ですが、ニーズに応えるのが大学というか、我々の考えなんです。まずは1年で単位が取れて修士論文が書けるコースを何としてもつくろうと、平日が中心の大学院の課程から土日と夜間も含め単位が修得できる新しい形の大学院をつくることにしました。これは教員の皆さんにとっては「何て事をしてくれるんだ！」という仕組みでした。

また大学との協定で自治体職員に入っただけでなくまったく新しい業務形態ですからNPO 地方行政研究コースという以上NPOが非常に大事なんですが、NPOの皆さんに入っただけには授業料が根本的な問題で、払えない授業料問題をどうするのか。結論としては「免除するしかない」となる訳ですが、そんな簡単に免除できる訳はありません。そこでNPOや自治体と個別に相互連携協力協定を結び、1団体あたり1年に一人授業料免除で大学院に来ていただく仕組みをつくり、自治体やNPOには大学が求める情報提供をはじめ様々な形で協力をしていただく互恵的協力関係を前提とすることとしました。

こういった経緯で形を整えましたが、大学側はすごく嫌がりました。最初は「とんでもない！」という話だったんですが、そこは石田先生や白石先生のもの凄いお力で、もちろん喜んでではなく嫌々だったかもしれませ

んが、このメンバーで大きな一歩を踏み出しました。

白石 スピード感のあるつくり方だけではないんです。自治体の管理職が必要だという話をしたのは、私が海外に行っていた時なので2000年頃の事ですね。帰国後、大学の事を考えてそんなにおもしろそうな事をやろうとしているのであれば、NPOを交えればどうかという話をして、中身を考えてのが2001年で2003年にスタートしました。という事は、2002年春には文科省から設立の許可をいただいて入試広告を出さなければいけない訳で、1年足らずの間に人数もコース内容も決めて、奨学金無料、推薦入試といった事は散々言われましたが、どういった力で突破したのかはさて置き、立案のアイデアはしっかりと考えてやりました。

協定締結のために私たちは奔走していましたが、随分と短期間に皆さんが協力してくださったので受け入れ体制をつくる事ができ、制度をつくって広報に入りました。これだけの説明では読み取れないかもしれませんが、時代のニーズにマッチしていたので順調に進む事ができました。

富野 私の経験から言うと、龍谷大学は自治体の皆さんとの関係が非常に近いので、提案



をして集まっていたので会議でお互いの意見を出し合っていると、すごくやりやすかったです。また、NPOの方々ともすごく近い関係なので、白石先生や他の先生方も含めて意見交換をしてみると、当時としては非常にユニークな大学院でした。

この頃の龍谷大学は非常に特異な存在だったんです。当時（今もそうですが）大学院は人気がなく定員に対して欠員があたりまえで文科省もすごく困っていたんです。龍谷大学はこの制度があったので定員に至らない事もありましたが、少なくともほぼ定員程度は来ていただけていました。学部外の大学院生と現役のNPO、自治体の職員が同じ空間で互いが様々に学び合う。この制度ならではの良さが、当時はものすごい事だったんだと思います。現在の大学院の状況は分かりませんが、龍谷大学は一つのモデルになった、と。

理系系ではなく文系の大学院に人気がない事は文科省も頭を悩ませてきたんです。龍谷大学も対象となっていますが、つい最近、文科省は大学院に活を入れる名目でソーシャルイノベーションコースをつくり、社会が本当に求めている大学院の形に再編する助成制度をつくりました。その動きについても龍谷大学がいつも定員近くまで満たしているのは、大きな情報としてあったんだと思います。やり方はあるという事でこういった制度ができましたし、この流れが大学院の活性化に繋がったと。だから龍谷大学は政策学部をつくる際に学部と大学院を同時につくる事ができたんですが、これがまたなかなかない事ですよ、白石先生？

白石 皆さんはご存知ないかもしれませんが、通常の大学制度は学部をつくり最初の4

年生が卒業する時に次の修士課程の申請をする。修士を出すときに博士を申請するのが新設学部一般的な方法だったんですが、三つ同時に申請してつくったのは前例のない事でした。母体がなくても一気につくろうというのは当時私たちが大学院を必須と考えていた、大学院改革の下で学部改革をするという決意の現れでした。

■ (4) 文科省大型国際研究プロジェクト補助による研究の飛躍 (2003年～) ■

富野 政策学部・政策学研究科はとにかく社会との関係性がものすごく大事で、設立前から社会との関係を構築し深めてきました。そういった経緯もあって形をつくる事ができた。その下準備がなければ実現しなかったという事も申し上げておきます。

社会的な面から言うと、政策系の大学院に対しての社会的な評価が一定程度の意見も含めていただけた時に、突然降って湧いたのが文科省の大型研究助成プロジェクト「大学院教育改革支援プログラム」でした。その際の助成金が2億円を超えていたんですよ？

白石 資料3ページの図2をご覧ください。当時は龍谷大学大学院 NPO・地方行政研究コースと呼んでいましたが、これが文科省の2007、2008年度の大学評価研究委託事業のモデル事業となり、1年で数千万円の助成金がありました。それが2007～2009年の3カ年の事業でした。さらに2008～2010年の戦略的大学連携事業が大型研究助成プロジェクト「大学院教育改革支援プログラム」で、こちらに関しては後ほど大石先生にお聞きしましょう。

今、資料を拝見して驚いたんですが、2008

年、2009年、2010年とLORCフェーズ2は1年で数千万円の助成金をいただいていた。おそらく当時の文系の中では一番たくさんの補助金を取った記憶があります。この数年に集結して一気に大きな金額を取ったのは富野先生の功績です。

富野 いえいえ、この辺りは土山先生が大活躍されたので、ぜひお話していただきましょう。

土山 まさに「かけまわっていた」だけで（笑）。ただお金の話としては、その頃いくつかのファンドが重なって入っていて、それぞれに計画をつくるなどいろいろと準備が大変だった記憶があります。先ほど富野先生が2億円とおっしゃっていたのはLORCフェーズ1の5年間の金額で、大学院GPはそこまで大きくはなかったと思いますが、それでも相当ではあったと。

大学院GPで大きかったのは先ほどもお話しに出ていた奨学金をめぐって、採択によって肯定的な評価が変わったことでした。白石さん富野さんの説得で「それが呼び水となって（入学者が）たくさん来ます」と口説いて付けていただいたんですが、しばらくは奨学金枠の確保も大変でした。応募状況を聞きながら「定員割れしそう…」となる協定先に「誰かいませんか？」と電話をかけたりもしました。最初に連携協定を結ぶ際は、先生方の知人がいない自治体の人事課に電話でアポをとって営業もしました。枚方市が協定を結んでくださり、しばらくしてからはコンスタントに来られるようになり、すごく喜んだのを覚えています。ただ、「来年から奨学金は付きません」といつ言われるかという危機感がありましたが、大学院GPに採択されて、学

内で先駆的に評価されたコースだという目線を得て、奨学金制度も安定したと思っています。金銭だけじゃない評価がGPを取る事でもたらされたという印象です。

富野 このプロジェクトを申請する時は、「そんなに大きなプロジェクトが取れるの？大丈夫？」という心配がありました。私は小さなプロジェクトや中間プロジェクトは絶対に取れませんよと言っていたんです。ただ、大きなプロジェクトであればどこについて良いのか分からないですし、細かな事まで説明する必要もないのでその方が良いと、説得した訳ではありませんが「では、やってみようか？」という事になったんです。小さなプロジェクトはよく見えて細部まで突っ込まれるんですが、新しく大きなプロジェクトであれば突っ込み所を決めにくいところがあると。だから取れたという感覚はあったんですが、2億4000万円だったと思います。これはものすごく大きなお金で我々が何をやったのかと言うと、潤沢なお金を使ってぜいたくな事をしました。

まず、JR京都駅前の日本生命ビルの4階フロアを全面借り切り、事務局を運営しました。大学の中だけでなく、全世界を相手に世界中からあらゆる人たちが、日本中から様々な研究者が集まる、そういったプロジェクト



を想定しました。とにかく分かりやすくて集まりやすく、みんながいろいろな事をやりやすい場所にしたんです。今だから言えますが、家賃が月40万円だったんです。半額にしてくださったんですが、ある意味すごく豊かな環境で研究を進める事ができました。相手は国際社会ですから、まずは世界的な課題として新しいコンセプトをどのように打ち出すのか。資料にも書いていますが、例えばグローカリズムという言葉は今大流行していますが、当時日本はもちろん世界でも使われていませんでした。「これは英語じゃない!」という感じで、実際に日本でグローカリズムという言葉は龍谷大学が言い出し、同時多発的に様々な所で使い始められました。ただ、間違いなく龍谷大学が先頭の一団に入っていました。

また、マルチパートナーシップは完全に独自のもので、パートナーシップはイギリスの政策として出た言葉ですが、それはマルチでなければいけないと。単なるパートナーシップではなくマルチである事に意味があると世界に提案し、現在はそういう言葉として使われています。

地域公共人材や地域公共政策については土山先生が一番こだわりをおもちだと思います。当初は(「地域人材」という用語だったときには)「地域」をつけると対象が狭まるのではと強くおっしゃって、否定的でしたが、現在はどうですか…? とにかく地域公

共政策という言葉は今の日本では当たり前に使われていますが、明らかに龍谷大学のプロジェクトが提起したものです。

そして社会的認証制度、地域公共人材の資格制度ですね。これはヨーロッパのEQFとアメリカのCap Stoneのハイブリッド型の人材認証システムです。いろいろな事を学んだ最後に実務的なトレーニングを積み、先の二つを合わせて一つのシステムとして展開し、人材としての認証をします。私たちが目指す地域公共人材は、マルチパートナーシップの世界を築くため、あるいは指導するための人材です。ですから一つのセクターで動くだけではダメで、セクターをどんどん移動しながら人材が流動する世界をつくっていく必要があります。日本の最もまずい構造は人材が固定的になり、囲い込まれて動かない事。だから日本社会は活力がないんです。そこで人材が流動するための認証制度とセクター間のパスワードとしてこの資格を機能させようというコンセプトで始めました。

「新しい公共」は今当然だと言われているですが、セクターとマルチパートナーをどのように結び付けるかという研究の中で、「新しい公共」という言葉が当然のように出てきたので非常に新しいコンセプトが次々と誕生しました。

そろそろお時間となってきましたので、最後にこの研究の最も特徴的な点を申し上げ



ます。

それは研究成果を事業に転換し責任をもって社会的な事業として定着させるという事で、これは研究者としては非常に危険な行為です。通常、研究は研究、事業は事業と区別するんですが、私たちは研究成果の一つの形として社会の中できちんと機能させました。

資料にも書いていますが、龍谷大学でいうとまずはLORC(地域公共人材・政策開発リサーチセンター)をつくりました。関西一円の大学が原則公募で大学院生を募集し研究助手として給料を支払い、そこで成長した後実際に社会に出るというシステムで、(財)地域公共人材開発機構は先ほどの資格制度を財団法人として機能させたものです。また、(NPO)グローバル人材開発機構は京都産業大学を中心に社会人や企業と一緒に新しい人材を育成するNPOです。(社)京都

府北部地域・大学連携機構は大学の立地が少ない京都府北部に大学の機能を果たすような基盤をとって、京都地域の大学が中心となり福知山に本部を置き研究プロジェクトとして活動してきました。

このように実体のある事業と研究成果を還元する形で機能させ、現在進行形で続く様々な活動の基盤をつくってきました。

この後、質疑のお時間がありますが、そこに繋がる大まかな流れがお話できたと思います。皆さんも様々なご質問やご意見があると思いますので、次の場でお話していただきたいと思います。

ご静聴、ありがとうございました。

今里 ありがとうございました。

(2025年9月27日)

2025年度（第3回）

龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム 公開講演会

「多様な連携によるまちづくり 洲本市域学連携事業12年の成果と、今後の展望」

洲本市企画情報部企画課 新エネ・域学連携担当係長
高橋 壱

高橋壱（たかはし はじめ）

2000年に五色町（現洲本市）に入庁。農村振興に携わる部署に長らく勤務した後、2019年から現職。現在まで、再生可能エネルギー推進に18年、大学との連携による地域づくり“域学連携事業”に12年従事。2017年には龍谷大学政策学部との連携により、売電利益を地域に還元する“地域貢献型メガソーラー”を市内のため池水面に設置。



■はじめに■

白石 本日は「多様な連携によるまちづくり 洲本市域学連携事業12年の成果と、今後の展望」という事で、兵庫県洲本市役所 新エネ・域学連携担当係長の高橋壱氏をお招きしました。

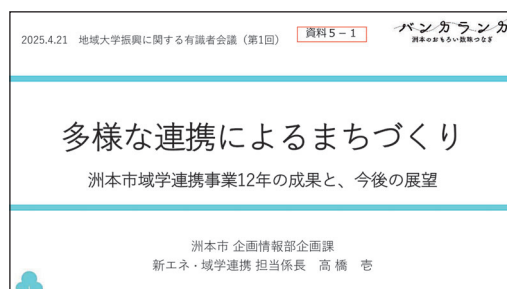
早速ですが、自己紹介をしていただきながら講演を始めていただきたいと思います。高橋さん、よろしくお願いたします。

高橋 皆さん、こんにちは。洲本市役所企画課の高橋です。本日はよろしくお願いたします。

今朝、淡路島からやって来たんですが、今回の講演会に向けて作成したレジュメが諸般の事情で使用できないとの事、急遽ご用意したレジュメを元にお話を進めさせていただきます。こちらは少し前に私が文部科学省に招かれ、「大学はもっと地域に出て多彩な活動をしよう」といったお話をさせていただいた時のものになります。文科省に新設され

た地域大学振興室では、様々な有識者をお招きして多様な課題が検討されています。そこでも「域学連携」というキーワードが出てくるのですが、もともとは総務省が地域と大学の連携を推進していて、現在は文科省も同様の体制になっているといった内容も併せてご紹介させていただきました。

私は生まれも育ちも淡路島の洲本市で、農家の長男として生まれ市役所に入って25年になります。現在の肩書は新エネ・域学連携担当係長と少し変わっていて、再生可能エネルギーの取り組みを18年、域学連携を12年担当しています。役所では3年を目処にした部署異動が多いんですが、私は異動しても仕事ごと異動するので一つの仕事に長く就い



ている少し変わった職員です。本日は域学連携の取り組みを中心にお話をさせていただきます。

I . 淡路島・洲本市の紹介

■淡路島と洲本市■

高橋 せっかくなので淡路島の紹介をさせていただきます。

淡路島は東京 23 区と同等の広さがあり、人口は減少していますが現在は約 13 万人が暮らしています。島には北から淡路市、洲本市、南あわじ市と三つの市があり、面積も人口も 3 市ではほぼ 3 等分しています。もともとは 1 市 10 町あったんですが、平成の大合併で 3 市になりました。人口 4 万人の洲本市と西側にあった人口 1 万人の五色町が合併して現在の洲本市になったんですが、私は旧五色町の役場に入り合併後洲本市の職員になりました。

島を引いて見るとスライドの写真のような感じで、島なので高い山は少なく小高い山に鹿や猪がたくさん住んでいます。一部市街地も形成されていますが、大半は中山間地域と呼ばれるなだらかな丘陵地帯です。高齢化率は高いのですが、温暖で雪も降らないので

農業が盛んに行われています。

■洲本市の町並みと農漁業・食、観光、産業■

洲本市の東側に洲本市街地があり、かつては洲本城の城下町として栄えた町並みも残っていて、近代になるとカネボウを誘致して紡績産業で栄えました。きれいな砂浜がある大浜海岸には海水浴客がたくさん訪れます。赤煉瓦づくりの紡績工場の建物跡が多く残っていて、近代化産業遺産の指定も受けています。最近の淡路島は海沿いの開発が進みリゾート地のような雰囲気になっていて、海に見えるエリアは地価の 0 が一つ増えるくらいのバブルの状態、私の小さい頃とは景色が一変しています。旧五色町は西海岸なので夕日がとてもきれいですが、冬になると西風が強くて潮が上がって家屋がすぐダメになるので地価も低かったんですが、最近はそうではなく観光施設が次々と建っています。

ウェルネスパーク五色という大きな公園があり、重点「道の駅」の指定も受け、現在再オープンを目指して整備中です。また、高田屋嘉兵衛という司馬遼太郎の『菜の花の沖』の主人公で江戸時代に北前船に乗って活躍した豪商の生誕地でもあります。

淡路島は美味しい食べ物が豊富でタマネギは淡路島ブランドが定着したようですし、海に囲まれているので新鮮な魚介類も美味しいです。牛もたくさん飼われていて、私の両親も牛の畜産農家です。黒毛和牛の繁殖経営といって母牛を飼って子牛を産ませて出荷するスタイルで、子牛が上手く育って良い肉になると神戸ビーフになる、いわゆるブランド牛を支える産地でもあります。皆さんにもぜひ淡路島の美味しいものを楽しんでいただきたいと思います。



神戸ビーフは兵庫県から一步でも外に出ると神戸ビーフにならないという、非常に厳しいブランド基準になっています。兵庫県下で生産される和牛の子牛の約 6 割が淡路島産なので、神戸ビーフの 6 割は淡路島で生まれた子牛かもしれません。ちなみに淡路で生まれたメスの子牛は三重県がよく買っていて松阪牛になります。特選松阪牛は兵庫県産のメスの子牛を仕上げたもので、全国のブランド牛も支えています。現在和牛の子牛は一頭 100 万円ぐらいで売られていますが、私が中学生の頃は 40 万円ほどだったので絶好調と言えます。

観光地としての見どころも様々ありますが、観光客の特徴として日帰りが少ないという点があげられます。淡路島全体の観光客数は年間約 1,400 万人ですが、洲本市にはわずか 10 分の 1 ほどしか来ていません。お隣の市の方が人気の観光スポットがたくさんあって、洲本市にもいろいろとあるんですが日帰り観光が弱い。しかし、宿泊客は 3 市の中で一番多く、ホテルニューアワジの CM は皆さんもご覧になった事があると思いますが、洲本温泉や温泉街があるので宿泊されるお客様は多くいらっしゃいます。

また、洲本市は兵庫県下でも市になったのが早く、島の中心地なので新開地と呼ばれる飲み屋街もあり、全国や兵庫県と比較すると飲食サービス業や宿泊業の割合が高いという特徴があり、様々な人が集まる場所だと思っています。

■洲本市の人口減少■

洲本市の人口は毎年 500 人ずつ減り続けていて、市全域が過疎地域の指定を受けています。皆さんも「消滅可能性自治体」という言

葉をよく耳にされていると思いますが、実は洲本市も選ばれています。今回の消滅可能性自治体の認定は令和 2 年の国勢調査によるもので、お隣の市は消滅可能性自治体から卒業していて、洲本市は卒業できなかったという残念な結果でした。

特に若者や女性が高校卒業後にどんどん島外に出てしまうのは、淡路島に総合大学がないのが要因で、大学や専門学校への進学を機に島外に出てそのまま就職し帰島しない状況が長く続いています。他の過疎地域も同じ課題を抱えているのかもしれませんが、若い人が少なくて寂しい事が一番の課題です。ただ、淡路島には働く所がまったくない訳ではなく、有効求人倍率は 2 倍ほどありとにかく人手は不足しています。でも新卒の学生が帰って来ないのは、就職先の大半がホテルと高齢者福祉施設で新卒者となかなかマッチしないからです。

II . 洲本市の域学連携事業

■洲本市の域学連携事業■

洲本市では 2013 年度から域学連携事業に取り組んでいます。

若い人が出ていくばかりではなく逆に呼び込もうと、特に大学と連携してまちづくりをしよう、学生にたくさん来てもらおうと今年で 13 年目に突入しています。域学連携という言葉はもともと総務省が使い始めたんですが、今、総務省のホームページ等を見てもおそらくこの言葉は出てきません。関係人口や地域おこし協力隊をより強く推しているのかなと感じています。地域と大学が相互に連携してプロジェクトを進めて、双方が Win Win になればと総務省が提唱した事業

に洲本市も取り組んでいます。

■域学連携事業の関係者の特徴■

[1. 大学・学生]

洲本市の域学連携の特徴としては島に来てくれる学生はやはり京阪神からが多く、時折東京からの学生もいますが、遠いと交通費が高くなる問題があります。活動は日帰りから2泊3日が中心で1泊2日が一番多く、中には1～2ヶ月と長期滞在する方もいらっしゃって様々な活動に取り組んでいただいています。単位を目的に来られるのは龍谷大学、武庫川女子大くらいと少なく、その他は単位目的でない方が来られています。ゼミ活動の方も多く、あとはサークル活動やガクチカとして参加される方もいらっしゃいます。

現役学生が対象なので卒業すると関係性が薄くなる事が課題としてあげられます。学生のメールアドレスの大半が大学のアドレスなので、卒業と同時にメールが送信できなくなるのが大きな問題点で、改善の余地があると考えています。

[2. 地域]

学生は町内会や任意団体、企業などに受け入れていただいています。受け入れ先が様々なので活動のテーマや内容も多種多様で、町内会に入ると農業寄りであったり市街地に入ると空き家、空き店舗だったり地域に応じたテーマを設定しています。

域学連携がスタートした1、2年目は民泊を推奨していました。受け入れ先に宿泊すれば仲良くなって…と思っていたんですがなかなか上手いかず、受け入れ側も大変なので現在は推奨していません。また、地域側にはあまり負担をかけないようにと考えてい

ますが、謝金を払ったりもしていません。地域のための活動なのでお金がどうこうではなく、地域と学生がうまく連携して取り組みを進めてくださっています。

地域で一番大事なのはしっかりと学生を受け止めてくださるリーダーがいるかどうかで、そういう方がいない所はこの事業に向かないと思っています。役所の仕事ですから薄く広くといった部分も当然ありますが、それではおそらくハッピーにはならないだろうと。学生がしっかりと楽しく活動するためには地域側にもしっかりとした人材が必要ですし、そういった所に学生を送り込みたいと思っています。

[3. 行政]

市役所では私ともう1名の2名で事業を回していますが、大抵の事は私がやっています。

交通費を市が負担するのは先ほども申し上げた通り学生の負担軽減のためで、よく「バイトが忙しくなかなか地域に入れない…」とお金に困っている学生の声を耳にするからです。そういった理由で洲本市に来れないのは寂しいので予算の範囲内ですが市で負担しています。ただ「東京から新幹線で」となると予算があつという間にパンクしてしまうので、京阪神の学生が多いのもそういった理由があります。

先ほど民泊のお話をしましたが、学生が無料で滞在できる施設を市が用意していて、現在市内に6ヶ所、最大50～60人が宿泊できるインフラの整備もしています。

役所としては、地域と大学のマッチングが最重要業務だと考えていて、大学や学生がやりたい事と地域がやって欲しい事をいかに上手く結び付けるか、すり合わせるかが非常

に大事なポイントです。最初にミスマッチがあると上手く回らないので、特に誰が受け入れるのか、学生を預けて大丈夫なリーダーがいるかどうかを一番に見ています。

問題点は予算とマンパワーの不足で、洲本は非常に小さな市なので財政も豊かではなく、学生の交通費を負担するといっても莫大な予算を取る事はできません。現在は職員2人で回していますが、もう少しスタッフがいたら取り組みが発展するのに…と常々思っています。

[4. 中間支援者]

地域と大学はもちろん行政が取りもってマッチングしていますが、例えば地域おこし協力隊など非常に良い働きをしてくださる中間支援者もたくさんいらっしゃいます。さらには民間企業をはじめとする様々な方が大学と地域の間や役所と地域の間に入ってくださるなど、多様な支援のおかげで取り組みがスムーズになっています。特に洲本の協力隊は30代がメインで、なるべく学生に近い年齢の方がいた方が活動はより良くなると実感しています。行政の仕事はセンスがないところもあるので、センスの良い方々が上手くハンドリングしてくださる事も大事です。

中間支援者がそのまま学生も引き受けてくださる事例もあり、例えば長期インターンとして働いていただく形も受け皿の一つとして機能しています。中間支援者や地域おこし協力隊には市からお給料をお支払いしていますが、民間の企業や団体に中間支援をしていただいても委託費や負担金はお支払いしていません。業務全般をお願いして域学連携を回していただく形も一つの方法ですが、兎にも角にも予算がないのが現状です。善意

という言葉でまとめてはいけませんし、関わってくださる方々はそれぞれに狙いもあって参画いただけていますが、きちんとした対価の支払いができればと思いつつも難しい状態です。

また、この種の取り組みはなかなか商売に繋がりにくい側面があります。例えば大学が地域に学生を送り込んで活動するPBLといった形もあり、そういった取り組みを推奨はするけれど予算は置かない大学が多い。予算がなく、受け入れる民間がなくてもうまく回していかなければならない苦勞もあります。

■域学連携事業の実績■

2013年からの12年間で計56大学から約1,400人の大学生が洲本市を訪れ、様々な活動に挑戦していただきました。数えてみるとこんな大きな数字になりましたが、「バンカランカ-洲本のおもしろい数珠つなぎ」というホームページに多岐にわたる成果を掲載していますので、ぜひご覧になってください。ちなみに「バンカランカ」は「学ばんか?」「作らんか?」といった呼び掛けの方言で、ポジティブな語尾をくっつけた「バンカランカ」という名称にしました。

では、域学連携の特徴的な実績をいくつか紹介します。



[1. 学生滞在拠点「ついではん」の改修]

一つ目は「ついではん」という建物で、こちらは京都工芸繊維大学のプロジェクトです。築100年で30年ほど空き家だった古民家を、洲本市が取得し公共施設にしました。いろいろな事情があり取得したんですが、朽ちた家屋のまま置いておけないのでリノベーションしよう。当時は地方創生が叫ばれはじめた時代で有利な補助金を活用する事もできましたが、普通に地元の設計士に図面を引いてもらい工事発注して建築するといった使い方ができない少々変わった補助金という事もあって、大学生につくらせようというプロジェクトになりました。学生の力だけでは当然難しいところもあるので地元の工務店や設計士が指導役に入り、京都工芸繊維大学の鈴木先生にお願いして引き受けていただきました。夏休みや冬休みといった長期休暇を活用しながら2年以上をかけて、スライドの写真のような改修完成に至った取り組みです。

この取り組みに関わった学生には建物の活用といった企画提案はもちろん、実際に図面を引いて耐震計算などもやっていただきました。さらに現地でDIYによる改修なども大工さんに教えていただき、ペンキや土壁を塗ったり床を張ったりと学生自らが手掛けたプロジェクトです。

ついではんは学生が無料で滞在できる施設になっていて、同様のスキームで学生がリノベーションした滞在拠点が洲本市内に6ヶ所あります。こういった施設ができた事で洲本市の域学連携は大きく発展しました。交通費の支援もそうですが、無料宿泊所は学生の負担を減らすための非常に大きな役割を果たしています。

[2. 洲本市域学連携事業推進計画書の策定]

続いての取り組みは京都大学エスノ3ジョウというサークル活動によるものです。

洲本市の域学連携は2013年にスタートしましたが、ビジョンも作らずただがむしやらに突っ走ってしまったので、「ビジョンをつくりましょう!」という学生の提案に「では、言い出したあなたがつくってください」と、京都大学の学生が計画書を策定してくれました。本来は行政がつくるべきなのかもしれませんが、学生の力でつくられたビジョンになっています。細かな説明はしませんが、結構良い企画書をつくってくれたと思っています。

白石 自律的展開期になりましたね。

高橋 はい、今年更新しようという話が出ています。

[3. 学内コンテスト最優秀プランの実現]

高橋 次は流通科学大学の取り組みです。域学連携で活動する大学のよくある形は、日帰りや1泊2日で洲本市内を一通り歩いて、いろいろな人の話を聞いて課題や魅力を調べて持ち帰って解決策やアイデアを考え、学内コンペをするといったものが多いんですが、まさにその一例になります。ただ、この事例で特筆すべきは学内コンペで最優秀賞を取ったチームが提案を形にするためにサークルを新設し、現在も洲本市で活動を継続している点です。非常にユニークな事例になっていて、新設したサークルは部活に昇格したという話も聞いています。青空マーケットの活性化をテーマにしたもので、月1回開催される青空マーケットの運営支援など活動を継続してくれています。

ちなみに最優秀賞を取ったチームリーダーがスライドの写真の女性で、大学を3年で卒業したという優秀な学生でした。そういった制度が流通科学大学にあるそうです。

白石 龍谷大学にも早期卒業制度という同様の制度がありますよ。

高橋 そうなんですね。奨学金も良いなと思いますが、時間を与えてくれるのもおもしろいなど。ユニークな学生たちでした。

[4. 竹原集落 12年での変化]

竹原集落はこの12年間継続して域学連携に取り組んでいて、学生を受け入れ続けている集落の一つです。限界集落と呼ばれるような非常に小さな集落ですが、とてもしっかりとしたリーダーがいらっしゃいます。龍谷大学にも最初から関わっていただいています。他の大学からも来ていただいています。たくさんの若い方々と交流し、様々なプロジェクトを重ねて最終的に住人が増えた。そんな集落として現在進行形で育っています。

[5. 域学連携卒業生の活躍]

先ほど卒業生との関係性が希薄になるというお話をさせていただきましたが、ほんの一部ですが超ユニークな学生がいて、卒業後も関わり続けてくれています。私の感覚で言うと全体の1パーセントぐらい、約1,400人の中のほんの十数名は未だに名前呼び合えています。龍谷大学の卒業生にも民間企業勤務を経て洲本市の地域おこし協力隊の一員となり洲本市に定着してくれた方がいて、竹原集落で原木シイタケの栽培などに取り組んでくれています。早稲田大学の卒業生は学校の先生をしながら域学連携を続け、現在

は近畿大学の講師となりゼミ生と共に活動が続けてくださっています。かつて炭焼きに使われた山道を整備し山歩きイベントを企画するなど、こちらも竹原集落のプロジェクトの一つになっています。

[6. NPO 法人 洲本市域学連携研究所の設立]

ついでにはんに関わった京都工芸繊維大学の卒業生には、大阪の建築会社に勤務しながら洲本市で活動が続けてくれている方がいます。市内に域学連携や学生の活動をサポートするNPO法人を立ち上げ、「学生時代にお世話になったから、これからは学生が洲本市で活躍できるように応援する」という熱い思いをもって活動しています。メンバーには龍谷大学のOBもいます。市街地にある商店街の空き店舗を学生が無料で滞在できる施設にリノベーションするなど、学生を全面的にサポートしてくれている団体です。

■域学連携で大事にしている事■

域学連携を進めていく上で大事にしている事をいくつかご紹介します。

こういった取り組みでは課題解決という言葉がよく使われますが、私たちは敢えて言わないようにしています。良いところを伸ばすと言う方が前向きですし、ポジティブな思



考の方が良いなど。課題と言うと上からになってしまうので、楽しんでやっておもしろければ良いといったノリもこの取り組みには大事だと考えています。

ネガティブな思考としては学生が来れば地域が一気に良くなると勘違いされている方もいらっしゃるの、そうではないんだと。学生も地域も万能ではない事をしっかりと認識し、身の丈に合った規模の活動をする。背伸びをし過ぎない事も大事ですし、やめるという選択肢をもつ事も重要で、既に大学の受け入れをやめた地域も実はあります。新しく受け入れる所もあればやめていく所もある、そんな取り組みになっています。

先ほどWin Winの取り組みだと言いましたが、相手にWinを求め過ぎると良くありません。「これだけしかしてくれないの?」と思い始めると、この取り組みは終わりだと私は思っています。自分で自分をハッピーと思えば良いし、ボーダーラインも自分にとってのWinも自分で決めれば良い。自分が良いと思えた上で、少し相手の事を考える心のもち方を大切にしています。

変化・継続・発展については、スタートから13年を迎え「同じような事をよく続けているな」といったお声も時には耳にします。でも、同じような事をやっているようで実は違う、常に変化し続けているのが洲本市の域学連携で、とにかく変化や刺激を大切に新しいものにチャレンジする。同じ事を続けるよりも、おもしろい事があればまずは飛び付いてみる。その連続で刺激的な活動が継続できていると。長く続けたから良いという訳ではありませんが、続いているのにはそれなりの理由があると私は思っています。

あとは属人的になりがちだという問題です。先ほど地域のリーダーが必要だとお話し

ましたが、リーダーの世代交代がむずかしいのは課題です。本当は私自身が世代交代をしなければならないのかもしれませんが、異動の辞令もなくずっと続けています。また、いろいろな方に域学連携に取り組んでいただく体制の整備や、担い手をもっと増やした方が良いという課題もあります。

2023年に域学連携10周年を記念し大きなシンポジウムを開催したんですが、そこで白石先生から「洲本市は域学連携の最先端であり続けなければならない」という金言をいただいたので、何とかこれからも頑張っていきたいと思っています。



Ⅲ．龍谷大学によるローカルイノベーション

■龍谷大学と洲本市の連携■

次に龍谷大学と洲本市が連携した取り組みをご紹介します。


龍谷大学は2013年にスタートした域学連携のきっかけを与えてくれた大学です。出会いのお話をしますと、2012年に龍谷大学で再生可能エネルギー塾が開講され、私は再生可能エネルギー担当という事で勉強のために通っていたんですが、そのうちに先生方と仲良くさせていただくようになりました。翌年、総務省から域学連携促進のために補助金を出すという話が出て、白石先生から「一緒


龍谷大学と洲本市の連携

 × 

- ・連携大学の一つ、龍谷大学は、再生可能エネルギーの活用による地域活性化をテーマの一つに掲げ、2013年度から洲本市で活動。
- ・龍谷大学による主な活動は下記の通り。

年度	出来事
2013	・洲本市再エネ条例制定支援
2014	・自家消費型小水力発電施設を設置
2016	・教授2名が発電会社 PS洲本㈱を設立
	・龍谷大、PS洲本、洲本市、市内の信金・信組の5者で地域貢献型再エネ事業推進協定を締結
2017	・協定に基づき、PS洲本が市内の農業用ため池に地域貢献型メガソーラーを設置




30

に応募しませんか?」とお声を掛けていただき、採択され補助金をいただいてスタートしたのが2013年でした。もし龍谷大学に通っていなければ、白石先生からお声をかけていただかなければ、洲本市の域学連携は始まっていませんでした。

ちなみに私が再エネ塾に通ったきっかけは、2012年に竹原集落のリーダーから「小水力発電を始めたい」とご相談をいただいたからです。淡路島は島なので水も少なく水力発電が難しい事は分かっていたんですが、それでも勉強したいと考えていた時に再エネ塾のチラシを目にして通い始めました。つまり竹原集落のご相談がなければ域学連携はスタートしていなかったんですね。このようなご縁といいますか、運命といいますか、巡り合わせが重なって域学連携は今日まで続いています。

龍谷大学は再生可能エネルギーを活用して洲本市を良くする事を活動のテーマの一つに掲げ、長く取り組んでいただいています。再エネをテーマにしているのは数ある連携大学の中でも龍谷大学だけで、様々なチャレンジをしていただいています。

■洲本市再エネ条例の制定■

洲本市で再エネ条例をつくるにあたり、様々な知見をいただきました。再エネ条例は

いろいろな自治体でつくっていますが、メガソーラーが次々とできている昨今、結構問題になっている所もあります。太陽光発電でつくった電気を20年間継続して買い取ってくれる「固定価格買取制度」ができてから、メガソーラーが次々とできました。しかし、その発電所が地域のためになっているのか、疑問に感じる方々が全国にいらっしたんです。地域のためになる発電所であるべきだという理念が再エネ条例の根幹になっていますが、洲本市での条例制定にあたり様々な考え方を龍谷大学の先生方に教えていただきました。

条例の理念は太陽光や風力といった再エネ資源は地域のものだという考え方で、洲本市に降り注ぐ太陽は洲本市のもので、それを使って事業を行うのであれば資源を有している地域に何らかの恩恵があってしかるべきではないか。洲本市再エネ条例はこの理念に基づいて市の方向性や姿勢を示しているもので、規制や罰則の条例ではありません。

■自家消費型小水力発電施設の設定■

スライドの写真は竹原集落での取り組みの様子です。竹原集落のリーダーから「小水力発電を始めたい」というご相談をいただき、当初は難しいと言っていましたが結果できたという取り組みで、この自家消費型小水



力発電施設も龍谷大学にやっていただきました。竹原集落は水がとて豊かで飲料水の供給所でもあります。農業用の小さな水路を流れる毎秒5リットルの水の力を使って水車を回して発電する施設を設置していただきました。施工は地元の方や学生が手伝ってくださったんですが、資金は龍谷大学に出していただきました。

白石 正確には龍谷大学ではなく PS 洲本（株）が出資しています。大学は経営等できませんので訂正しておきます。

高橋 ありがとうございます。スライドにありますように「ターゴ水車」という水車を入れています。当初は「ペルトン水車」を入れていたんですが、調子が悪くなったので2年ほど前にターゴ水車に更新しました。計画出力200ワットと非常に小さな発電機で、水量と落差で見ても120ワットぐらいしか出ていないので売ほどの電気ではありません。では何に使っているのかというと、自家消費用に水車の近くにリチウムイオンのバッテリーを置き、水車を24時間連続で発電すれば3,000ワットアワー＝1,000ワットのドライヤーを3時間動かせる電気の量になります。微々たるものですが、溜めた電力を集落の一本道を照らすフットライトやLED街灯、防

犯カメラなどの電源にするために設置しました。

お金にもならないのにこういった取り組みをしたのは、過疎化が進む集落に人を呼び込むきっかけになればというのが目的の一つでした。集落を明るく安全にという目的は当然ですが、人を呼び込む力になればと。実際こういった自家消費型の発電施設は結構珍しくて、修学旅行生やJICAの研修、自治体の視察などたくさんの方が来られるようになり、大学の狙いはしっかりと達成できた施設になっています。ちなみに防犯カメラは物騒だからではなく、登山ルートで遭難者が出た際に警察から情報提供を求められるため設置しました。

■地域貢献型再エネ事業の推進■

先ほど白石先生からお話がありましたPS洲本（株）と龍谷大学、洲本市、洲本信用金庫、淡陽信用組合の5者で2016年に連携協定を締結。地域貢献型再生可能エネルギー事業を推進すべく、地域と大学による域学連携から産官学民連携の形に広げ、さらに再エネを推進していく体制を整えました。この協定に基づき市内2ヶ所の農業用ため池に浮かぶ太陽光発電施設を設置しました。

■二つの地域貢献型太陽光発電所の設置■

スライドに2枚の写真がありますが、最初にできたのが左の塔下新池ため池ソーラー発電所で、発電出力は70キロワットとそんなに大きな発電所ではありません。右は龍谷大学の名称を掲げている龍谷フロートソーラーパーク洲本で、こちらは1.7メガワットといわゆるメガクラスの発電所になってい



ます。

この施設の事業主体になっているPS洲本(株)は、白石先生と深尾先生のお二人がつくられた現地法人で、発電所2ヶ所合わせて約8億円の総事業費は地元の金融機関と銀行から各々2億円、龍谷大学から4億円の資金を調達していただきました。先生方が大きなリスクを背負って資金調達もしてくださり、発電所をつくっていただきました。

発電所はどちらもため池に浮かぶフロートタイプになっています。淡路島は島国で水資源に乏しいので、先人たちが農業用ため池をたくさんつくっているんですね。ちなみに全国のため池数自治体ランキングの1位はお隣の淡路市で洲本市は3位か4位にランキングされています。淡路島特有の資源でもあるため池を使えば、森林を伐採しなくてもフラットな池の上に太陽光パネルを浮かべて、若干ですが冷却効果も見込まれます。夏場の炎天下だと太陽光パネルの発電力も少し落ちますが、池の水冷効果で発電量が増える事も計算の上で先生方はため池を選ばれました。

もう一点、ため池は稲作のための大切な施設でしたが、高齢化が進み農家も減少し耕作放棄地も増えて、昔ほどの価値がなくなっている所も散見されます。すると、皆さんため池の管理をしなくなるんですね。ため池は様々な管理が必要でそれがおろそかになる

と非常に危険な施設になります。大雨で堤体が決壊し水害を起こすといった危険から守る役割も含め、ソーラー発電の設置場所にしたという経緯もあります。

白石 水利権者や近隣の方々に毎年お金をお支払いして管理をお手伝いいただく形になっています。

■地域貢献型再エネ事業のスキーム

高橋 何をもって地域貢献型なのかというお話になりますが、この施設をつくるために必要な人・物・金はなるべく地域内で賄うというのが一つです。地元の金融機関を使い、地元でため池の管理をして施設を一番よく見てくださる方々に「何かあったら教えてください」とお願いして対価を支払う。また、メンテナンスもなるべく地元の業者をお願いしています。

もう一つは売電利益を地域活性化のために使う。これが非常に大きなポイントになっています。PS洲本(株)は非営利の株式会社で、固定価格買取制度で売電した売り上げから借金を返済し、ランニングコストを支払い、最終的に残った利益はすべて洲本市の活性化のために寄付していただいています。洲本市にとって非常にありがたい会社で、こういったスキームの施設は全国的にも例があ

2つの地域貢献型太陽光発電所の設置

塔下新池ため池ソーラー発電所	龍谷フロートソーラーパーク洲本
水面面積: 0.3ha	水面面積: 4.8ha
設置面積: 0.1ha	設置面積: 1.8ha
発電出力: 0.07MW	発電出力: 1.7MW
事業費: 約0.2億円	事業費: 約7億円
事業主体: PS洲本(株)	事業主体: PS洲本(株)

地域貢献型再エネ事業のスキーム

地域貢献型再エネ事業とは

- ①人(施工業者・住民団体)物(未利用資源・公有財産)金(融資金融機関)が市内にある資源を中心に賄われることで、経済が循環する。
- ②売電利益が地域活性化のために活用される。

りません。風力発電でも売電利益の1パーセントを地域に還元するといった事例はありますが、利益をすべて地元に戻元して下さる、非常にありがたい取り組みです。

■発電所がもたらしたローカルイノベーション■

実際に売電利益を使った様々なプロジェクトが洲本市内で回っています。

一つは龍谷大学の分室「ユヌスソーシャルビジネスリサーチセンター洲本ランチ」の開設です。先生やスタッフは常駐しておらず普段は無人ですが、コワーキングスペースとして様々な方に使っていただいています。

また、地域で頑張っている若い方々に、例えば域学連携のプロジェクトを形にするための助成金も出資していただいています。2021年からの4年間で支援件数23件、約1,200万円の売電利益が地域で頑張る方々のプロジェクトの支援金として使われています。

IV. 域学連携の今後の展望

■多様な連携への発展・対応■

先ほども大事にしている事として変化のお話をしたんですが、地域と大学に連携を絞

る必要はないというのが最近の状況で、特に都市部の企業を含めて様々な形で連携しようという体制を取っています。洲本市には域学連携に長く取り組んできた素地がありますし、いろいろな方がチャレンジしやすい土壌が洲本市だからこそあると。

■淡路島ゼロイテコンソーシアムの設立・運営■

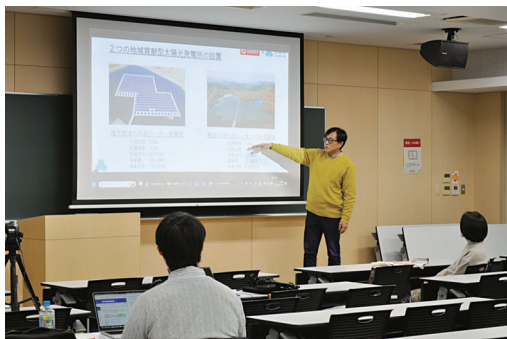
その取り組みの一つが2021年に設立した「淡路島ゼロイテコンソーシアム」です。

都市部の企業は社員研修やワーケーション、テレワークで淡路島に来る機会が結構あります。環境の良い淡路島で伸び伸びと働く事はもちろんですが、そういった企業は地域貢献にも意欲的で、せっかくなら赴いた先で何か新しいプロジェクトを、といったマインドをおもちです。そういった方々とのご縁を生かして一緒にプロジェクトを始める時に、ワンストップでサポートするプラットフォームとして淡路島ゼロイテコンソーシアムを設立しました。

地元で企画の立ち上げやまちづくりを手掛けている民間企業の(株)シマトワークスと淡路島信用金庫、そして洲本市の3者で設立。大きな成果が得られるのはこれからかだと思っていますが、いくつかのユニークな成果も生まれつつあります。

■淡路島クレストカレッジ開校■

その成果の一つが大阪にある(株)ワークアカデミーとの連携で開校した「淡路島クレストカレッジ」です。これまで行政主導だった域学連携を民間主導でやっという、洲本市の資源や魅力の活用、課題解決などをテーマに実践型の学びのプログラムをどんど



ん提供しています。大学から対価を得る形で学生にプログラムを提供し、いわゆるPBLをやっていただくという取り組みになっています。

また、地域活性化起業者という総務省の制度を活用し、現在民間2社から社員を派遣していただいています。彼らには域学連携や、淡路島クエストカレッジで学びをテーマにした学生や若者の誘致を担当していただいています。行政主導から民間の力も活用した域学連携に発展させながら継続しようとしています。

■最後に■

属人性のお話もさせていただきましたが、市役所だけの取り組みから市役所がいなくても回る取り組みに少しずつ移行している状態です。人材面でいうと淡路島クエストカレッジや地域おこし協力隊も頑張ってくれていますし、NPOなど市役所外の団体も育ってきています。

予算面ですが、先ほどの売電利益は市の予算に入れていないんですね。PS 洲本(株)から頑張っている方々に直接お金を出していただく取り組みなので、資金面でも人材面でも行政を外した形で回せる状態に育ちつつあります。そうすれば課題の一つの属人性も少しは緩和され、いろいろな方が域学連携を推進しやすくなると考えています。ここまですご用意したスライドに基づいたお話になります。

最後に少しだけご紹介させていただきます。皆さんのお手元のチラシにありますように、来たる2月21、22日に「多地域共創フォーラム HOPE 2026 in 洲本・千草竹原」が開催されます。竹原集落の小水力発電は最

初龍谷大学と九州大学で発電機を設置したんですが、その九州大学の先生や関係企業の(株)リバー・ヴィレッジが主催する、洲本市の域学連携、再生可能エネルギーの取り組みをテーマにしたシンポジウムになっています。皆さんもご参加いただければ光栄です。

ちなみに前週の2月14、15日にはNPO法人 洲本域学連携研究所主催の学会も予定しています。こちらは域学連携に取り組む学生が洲本市に集結して成果を発表するイベントです。

こういったシンポジウムやイベントに関わらず、本日ご縁をいただいた皆さんにはぜひ淡路島洲本市に来ていただきたいと思えます。その際には洲本市役所にもお立ち寄りください。私からのお話は以上になります。ご静聴、ありがとうございました。

白石 ありがとうございました。行政は普通の事は長くやり続けますが、常に新しい事を長く続けるのはなかなか難しいです。予算審議や基本計画、総合計画が変わる、市長が変われば落ちていくといった事業を数多く見てきました。

ご紹介いただいた内容からも想像していただけたと思いますが、市役所だけで取り組む形にはしないと最初から思っていました。仮に市役所がお金を出さない、プロジェクトを支援しないといても続けられるようにしなければと、私たちが事業を始めたり寄付を使わせいただいたり、様々な形で成果をあげるよう努力しています。

市役所の発信力はともかく大学の発信力は弱く、こういった事業を大学がやっている、或いは大学に関係する先生がやっているという事が伝わっていないのがとても残念

です。各所で新エネルギーについての公募があり、先日も応募して大賞を受賞させていただきましたが、政府関連系の賞状をいただいても全国に広がる事にはなかなか繋がらない。日本社会でのアピールはほとんど難しいと感じています。であれば、学生や若い人たちにインスタなどの SNS を使っていただいて、見た事や聞いた事はなくても関心をもつてくださるフォロワーを増やす事が一番かなと個人的には思っています。

このような困難の中、高橋さんはずっと取り組みを継続されています。役所の配置転換で振り出し以下に戻る事はどんな取り組みでも往々にしてあります。理解や協力をしてくださる職員を探すのがまずは大変ですし、

それをバトンタッチしていくのはさらに大変です。私は高橋さんに「どこにいても域学連携の職員にならないといけない」と市役所の中で思われるような、「高橋なら仕方がない」と言われるような人材になって欲しい。私がよく言う「スーパー公務員＝この人に頼る、属人的に市役所を回す人材」になって欲しいと、13年前に京都の飲み屋でお話をした熱い思いは今でも強くもっています。立派な役職にも就かれ、新しい担当課もつくられ、その思いが叶っていると今日改めて感じました。本日はありがとうございました。

(2025年12月13日)

分権型社会を拓く自治体の試みとNPOの多様な挑戦—地域社会のリーダーたちの実践とその成果— 第23号

発行日 2026（令和8）年3月

編集・発行 龍谷大学大学院
地域公共人材総合研究プログラム
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel. 075-642-1111

印刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047
京都市下京区松原通麩屋町東入石不動之町677-2
Tel. 075-343-0006

分権型社会を拓く自治体の試みとNPOの多様な挑戦

—地域社会のリーダーたちの実践とその成果— 第23号

龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム